

## 尾太以前 — 近世前期津輕領鉾山の復元と鉾山開発 —

長谷川 成一

【要旨】周知のように、尾太鉾山（現青森県中津軽郡西目屋村）は、陸奥国津軽領最大の鉾山で、かつて銀・銅・鉛の非鉄金属を大量に産出した鉾山であった。本稿は、弘前藩の官撰史書「津軽一統志」等の史料に見える、同鉾山開発記事の吟味を出発点として、十七世紀津軽領鉾山の復元し、開発の実態について検討をすることにした。

十七世紀の北日本における鉾山開発について、秋田領・南部領は厚い研究蓄積を持っているが、津軽領は史料の乏しさから大きな進展を見ないままだった。しかし近年、青森県史をはじめ自治体史の刊行が相次ぎ、次第に鉾山関係史料が各資料編に収載されたことで従来の見解を大幅に修正をする必要が生じてきたのである。本稿では、新たに発掘された史資料の再検討の結果、従来知られていなかった寛永・慶安期津軽領の金銀山が確認され、所在地も明らかになった。

次に領国貨幣に関する資料を手掛かりに考察した結果、最も古いもので明暦二年（一六五六）の文書に、領国貨幣による役銀徴収の事実が認められた。その背景には領国貨幣の領内流通を可能にした、領内銀山の稼行の実態があったことはまず間違いない。

寛文二年（一六六二）からは、津軽領内鉾山の見立てⅡ調査がピンポイント的に実施され、寒沢銀山、虹貝銀山では、キリシタン改めが実施されるほどの金掘り集団の集住がなされていた。銀山の稼行形態は、御手山すなわち藩の直支配であった。当時領内で最大の銀山であった寒沢銀山では、「掘分山」という藩と山師の両者で、採鉾した鉾石を販売した額を折半する形式を採用していた。領内鉾山で用いる鉄製鉾具は、八戸藩領の久慈大野鉄山産の鉾（鑿）や鉄材を加工したものと推定される。これは北奥における鉄材の流通圏に津軽領が包摂され、鉄製鉾具の供給を他領に依存した稼行体制であったことを示している。

弘前藩は、延宝三年（一六七五）から全領内に鉾山調査を下命し、各地の山師を積極的に集めて鉾山開発に従事させた。延宝四・五年からの尾太銀銅山の本格的な開発は、唐牛与右衛門の金銀銅惣山奉行就任によって強力に推進され、「南蛮絞」りという新たな精錬・冶金技術の導入が図られた。さらにオランダ・中国に対する江戸幕府の銅貿易政策のもとにあって、津軽から尾太銅の大坂廻漕が開始した。このことは大坂の銅市場に、津軽領の産銅が組み込まれたことを意味した。

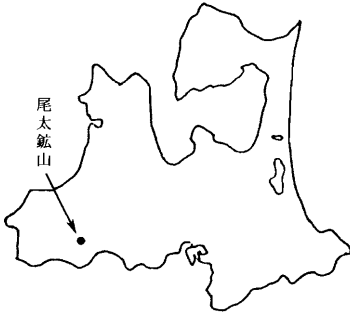
尾太銀銅山の開発と稼行は、領国貨幣の生産を主眼とした、河原沢金山から寒沢銀山にいたる初期鉾山政策とは一線を画し、弘前藩における鉾山政策の新たな展開として把握されるものであった。

## はじめに

尾太鉾山(現青森県中津軽郡西目屋村)は、陸奥国津軽領最大の鉾山で、かつて銀・銅・鉛の非鉄金属を大量に産出した(地図1参照)。寛政八年(一七九六)秋、当鉾山の付近を旅行した菅江真澄は、「雪の母呂太奇」に「オツフの名はもと蝦夷いへるなるべし」と地名の由来を記し、出羽国との境にそびえる山の「銅はるところ」と、銅鉾山であると述べている(『菅江真澄全集』第三巻 未来社 一九七八年 二〇二ページ)。十八世紀後半に入って尾太鉾山は、銅の産出が盛んになっていたから、このように真澄は記述したのであった。

ところで、享保十六年(一七三一)に編纂された弘前藩の官撰史書「津軽一統志」(東京国立博物館蔵)慶安三年(一六五〇)条には、「一、同三庚寅年、寒沢尾太山銀山出ル」と見え、寒沢尾太山の銀山開坑が同藩の鉾山開発の嚆矢として記録されている。「封内事実秘苑」(弘前市立図書館蔵岩見文庫)や「津軽編覧日記」

地図1 尾太鉾山の位置  
(青森県中津軽郡西目屋村)



(弘前市立図書館蔵八木橋文庫)もほぼ同様の記述をしており、慶安三年は、津軽領における銀山開坑の記念すべき年として正史に記録された。ただし「津軽編覧日記」は、割注に「サフ沢ハ銀山ヨリ二里程末也、銀山・サフ沢ハ別所ナリ」と記し、寒沢と銀山とは場所

が相違し、寒沢と尾太山には二里ほどの距離があるとして、注意を喚起している。

右の記述にも関わらず、従来の研究史においては正史「津軽一統志」などに見える慶安三年条をもって、弘前藩の銀山開発の出発ととらえ、特に疑問も差し挟まずに経過してきた。ちなみに弘前藩の鉾山旧記で尾太鉾山の詳細な記録である「山機録」(日本鉾業史料集刊行委員会編『日本鉾業史料集』第1期② 白亜書房 一九八一年)は、寛文元年(一六六一)から開始する鉾山調査の過程で偶然尾太鉾山を発見したと記しているので、慶安三年の尾太銀山開坑説は、同書からも否定されよう。

さてこの度、『青森県史 資料編 近世2 津軽1』(青森県 二〇〇二年、以後、『県史近世2』と略記)や『新編弘前市史』資料編2 近世編1(弘前市 一九九八年、以後、『弘前市史近世1』と略記)が刊行されて、津軽領における鉾山開発の様子や各鉾山に関して、断片的ながらも再考を迫る資料が収載されたことから、当該地方の初期鉾山と開発の実態について改めて検討する必要が生じてきた。果たして十八世紀前半に編纂された「津軽一統志」の記述は、十七世紀津軽領の鉾山について正確に記録しているのか、関係記事は全面的に信用できるのか。尾太開坑をもって津軽領銀山の開始と位置づけてよいかなど様々な疑問が生じてきたことから、改めて追究の機会を得たいと思うのである。

また津軽領の鉾山や領国貨幣については、伊東多三郎氏や榎本宗次氏、渡辺信夫氏などの先学がすでに貴重な研究成果を蓄積しており、本稿もこれら先学の業績に学び、多くを依拠している。しかし、例えば伊東氏の領国貨幣に関する古典的論文「近世初期の貨幣問題管見」(『近世史の研究』第五冊 吉川弘文館 一九八四年 所収)には、津軽領の鉾山開発と領国

貨幣について次のように論述している。

**津軽銀** 大日本貨幣史所載造幣局所蔵、津軽弘前銀がこれに当るものであろう。昆陽漫録に津軽花降銀とあるのも、この一種であろう。津軽藩では寛文・延宝年間、領内の金銀銅の増産に努め、寒沢の湯口・三目内沢・大和沢・尾太・濁沢・中泊等の金銀山の稼業が盛んになったことが、津軽藩日記・津軽歴代記録（類方筆書）に記されている（青森県史参照）。日記の延宝五年四月十五日の条に、尾太の産銀の極印尾太の二字を定めた、とある。

右の記述のなかで鉱山の所在地を「寒沢の湯口・三目内沢・大和沢・尾太・濁沢・中泊等の金銀山」と記している箇所は、地名比定を厳密にしていなかったために種々誤解を生じさせる内容になっている。<sup>3</sup>近刊の滝沢武雄『日本の貨幣の歴史』（吉川弘文館 一九九八年）においても、伊東氏の研究を引き、「寒沢の湯口等の金・銀山の稼業が盛んになった」（滝沢同書 一八四―一八五ページ）と見え、それが踏襲されている。これらについては、我々地元の研究者側から積極的に是正してゆかなくてはならない性格の問題であろう。

本稿は右のような目的と、平成十六年度に刊行を予定している『青森県史 資料編 近世3 津軽2』において、鉱山関係史料を編纂・収載することになっているので、十七世紀津軽領鉱山の復元と開発・稼行の実態を追究し、基礎研究の一環として青森県史の編纂に資することができればと考えている。

## 一、初期鉱山開発の中の北日本の鉱山

近世統一政権が鉱山開発に熱心であったことは、従来の研究史でも明らかにされてきたし、「日本賦税」所収の慶長三年（一五九八）八月「日本国総目録 日本国六拾余州御検地御蔵納金納高目録御給人分是」（国立公文書館内閣文庫蔵）の「日本国かね山御蔵入分」にみえる、国内各鉱山と金銀運上額の書き上げを一覧すれば首肯されよう。豊臣政権における生野銀山や徳川政権における佐渡金銀山は、全国政権の財政基盤として重要な位置を占めた。佐渡金銀山の開発は、江戸幕府の開幕当初から、大久保長安を石見銀山から佐渡に派遣して本格的に実施された。各地の鉱山開発は、幕府のみでなく各大名領でも行われ、小倉藩・水戸藩や長州藩を事例とした伊東多三郎氏や、加賀藩の小葉田淳氏の研究に詳しい。<sup>4</sup>

北日本の各大名も、当然のごとく領内鉱山の開発には熱心であり、南部領・秋田領でも金銀山の開発には余念がなかった。慶長七年に常陸国から秋田へ入部した佐竹氏は、秋田氏統治時代からの鉱山の再開発を目指し、藩境付近に点在する鉱山について南部氏との間で様々な係争が起こった。<sup>5</sup>

幕府は、慶長十三年四月、佐渡から金掘り人夫を南部領内に派遣して金山開発に従事させ、松前にも同様に金掘り人夫を南部から回して金山の開発をさせようとした（『青森県史 資料編 近世1 近世北奥の成立と北方世界』青森県 二〇〇二年、一七四ページ。以後、『県史近世1』と略記）。『佐渡年代記』上巻（佐渡郡教育会 一九三五年）一〇ページによれば、前年の慶長十二年、佐渡金銀山からの金銀の産出が減少著しかったことから、対処を命じられた大久保長安は急遽、駿府から佐渡へ派遣を下命

されている<sup>(6)</sup>。このことが背景にあって、産金銀の減少を恐れる幕府は、白根金山など躍進著しい南部領や松前の金銀山に注目し、佐渡の金掘り人夫を派遣して新たな金銀山の開発に従事させようと企図した。

なお、慶長十四年六月二十五日と推定される赤宇津満茂小姓宛近藤安道書状写（秋田藩家蔵文書二七 城下陪臣文書 秋田県公文書館蔵）に、院内銀山に赴こうとしていた「越国<sup>じこく</sup>之金鑿<sup>しほ</sup>衆」が、出羽国由利郡<sup>しほ</sup>笹子（現秋田県由利郡鳥海町）で山落<sup>やまおとし</sup>（山賊）に遭って金掘り多数が殺害された事件は、右の佐渡からの金掘り衆下向の一環と把握される。とすれば、慶長十三年からの北日本への金掘り派遣は、南部・松前だけでなく出羽国の有力鉱山へもなされていたことになり、従来考えられてきたよりは、広範囲な地域に及んでいたことが判明した。事件の詳細は、拙稿「慶長・元和期における出羽国の社会状況―山落・盗賊・悪党の横行と取締り―」（沼田哲編『「東北」の成立と展開―近世・近現代の地域形成と社会―』岩田書院 二〇〇二年 所収）を参照されたい。

このように幕府は北奥羽・松前の金銀山開発に着目していたのであり、それに応えて南部利直も慶長十五年十月、領内金山からの産金一三〇枚を徳川家康に献上している（『県史近世1』一八九ページ）。金銀山開発に熱心に取り組む幕府・大名双方の歴史的動向のなかで、北奥羽地域にあって鉱山開発が急激に進められたようだ。時期は若干前後するが、たとえば出羽国でも最大の産銀量を誇る、雄勝郡の院内銀山は慶長十一年に開坑している。また「羽後国仙北雄勝郡院内銀山記」（『日本庶民生活史料集成』第一〇巻 三一書房 一九七〇年）によれば、院内銀山の開坑時には、佐渡・延沢<sup>のへさわ</sup>・院内の三鉱山が国内で最大の鉱山であったという。延沢銀山（現山形県尾花沢市）は、「延沢御銀山大盛記」（『尾花沢市史資料 第十輯 延

沢銀山史料』尾花沢市 一九八五年）によれば、最上時代は最上氏の家臣延沢氏の支配下にあり、院内と同様、慶長年間に開かれたという。国内でも有数の金銀山が、慶長期に入って相次いで奥羽地方で開坑・稼行状態に入ったのであり、幕府が同地方に着目したのは当然のことであった。

また秋田藩の重臣梅津政景は、慶長十九年一月、秋田領内の有力金山五カ所を幕府に報告し、その中で檜木内金山<sup>ひのきない</sup>（現秋田県仙北郡西木村）は戸沢氏が角館を居城としていた時から稼行し、早口<sup>はやぐち</sup>（現北秋田郡田代町）・大葛<sup>おおくま</sup>（現比内町）は秋田実季が湊に在城の時から金山だが、稼行状況は不安定である。杉沢（現仙北郡西仙北町）は六、七年以前から、赤沢（現南秋田郡井川町）は三、四年以前から、すなわち佐竹氏が入部してから新たに稼行した金山である、と報告した（『県史近世1』二〇六～二〇七ページ）。

慶長期以来の北奥羽地方における金銀山の活況を図示したのが、寛永十一年（一六三四）ころに成立した「奥州羽州全図」（山口県文書館毛利家文庫蔵、川村博忠編『江戸幕府撰 慶長国絵図集成 付江戸初期日本総図』柏書房 二〇〇〇年）である。同図は、「日本中洲絵図」「山陰山陽四国九州絵図」（両絵図とも同前所収）とあわせて、十七世紀前半、夷島<sup>えいしま</sup>を除いた寛永期の日本国家を描写したものであって、特に陸奥・出羽には金山・銀山の所在が随所に示されている点が注目される（『江戸幕府撰 慶長国絵図集成 付江戸初期日本総図』解題 柏書房 二〇〇〇年 所収）。「奥州羽州全図」によれば、南部領では、白根付近の金山・西道金山<sup>さいどう</sup>・檜山金山、津軽領では「河原」付近の金山（写真1）、秋田領では、八森<sup>はちもろ</sup>付近の銀山、阿仁<sup>あに</sup>付近の銀山、檜木内<sup>はちもろ</sup>付近の金山、杉沢<sup>はちもろ</sup>付近の銀山、畠<sup>はた</sup>付近の金山、荒川<sup>あらかわ</sup>付近の銀山、南出羽では最上延沢<sup>えいざわ</sup>付近の銀山が目につく。すでに

開坑している院内や大葛、「梅津政景日記」に見える赤沢・早口などの金山は絵図中に描かれてないが、檜木内と杉沢は同日記と絵図とが一致する。このように金銀山を描いているのは、陸奥・出羽両国のみであり、佐渡国



写真1 「河原」付近の金山（上方が南）

や石見国・但馬国には佐渡・大森・生野などの金銀山は描き込まれていない。つまり当絵図は、奥羽両国は金銀山のあり方が他国と比較して特徴的

であり、描く必要のある情報として描写したものと考えたい。ここに近世初頭における陸奥・出羽両国の金銀山開発が、全国的に見ても画期的な展開を示した事業として把握されていたのであった。津軽領にもこれらの気運に乗り遅れることなく、金銀山開発の手が伸びていたことは間違いないだろう。

さて右絵図の津軽領内に見える「河原」付近の金山は、一体いかなる金山なのであろうか。その前に冒頭で述べたように、慶安三年の尾太銀山開坑をもって津軽領の鉱山開発の嚆矢と位置づけるのは、当絵図からしても問題があることはお分かりいただけるであろう。この金山の実態だけでなく、断片的な史料の中から、寛永・慶安期にいたる津軽領の鉱山について、復元を試みることにしたい。

寛永期津軽領の鉱山について、我々に有力な手がかりを与えてくれるのは、「梅津政景日記」である。同日記寛永六年三月二十五日条によれば、秋田領檜山郡小入川<sup>こいらがわ</sup>の山師が山廻りをした際に「津軽かね山」へ踏み迷い、津軽領で成敗されたという（『県史近世Ⅰ』二九七～二九八ページ）。「津軽かね山」とは、八森銀山と隣接する入良川<sup>いらがわ</sup>銀山（現青森県西津軽郡岩崎村）と推定される。秋田藩ではこの「津軽かね山」は津軽領に属するものと判断して、問題にすることを回避した。これは元和四年（一六一八）から開始した秋田・弘前両藩の境界交渉が一応の決着をみたことから、藩境の確定に基づいた決定であったようだ。

翌寛永七年六月には、「津かる銀山」から秋田藩に鉛購入の希望が寄せられた（『県史近世Ⅰ』三〇三ページ）。秋田藩は、「新城山」の売却値段で鉛を売ることにした。「新城山」とは、新城銀山<sup>しんじょうぎん</sup>（現秋田市）を指す。この「津かる銀山」とは、津軽領内のいかなる銀山を指すのか（筆者は地

理的にも、梅津政景が関与している点からして、前述の入良川銀山ではないかと推測する）確認はできないが、鉛を購入したいとの要望は、当該の銀山で灰吹法による銀の精錬・冶金が本格的に実施されていたことを示唆している。つまり当時、津軽領内では、領国貨幣として通用可能な灰吹銀が製造されていた可能性が高いのである。

『大日本古記録 梅津政景日記』八（岩波書店 一九六二年）寛永八年九月二十八日条によれば、秋田領内の欠落百姓が八森銀山で働いていたのに、子供を山師に預けて「津軽銀山」に出かけて行ってしまったことから、同藩では同銀山から帰還次第、その百姓を捕らえて帰還させることにしたという。「津軽銀山」とは、入良川銀山を指すものと推定される。このように八森銀山からいとも簡単に藩境を越えて津軽領の入良川銀山に入り込んで鉱山労働に従事できる状況が、津軽・秋田両領境に生じていたのである。これは前述のように、筆者が慶長・元和期において、由利郡笹子と雄勝郡の院内銀山との間の、往来のフレキシビリティを山落・悪党などの詮議や金掘りの移動を通じて明らかにした状況と相通じるものであろう。

八森銀山から入良川銀山への鉱山労働者の移動が明らかになったのである。寛永期秋田・津軽両領の西海岸藩境地帯では、この種の往来が比較的自由に行われていたと見てよからう。入良川銀山については、前掲「奥州羽州全図」には描写がなく、秋田領の八森銀山のみであったが、絵図に描き込まれていない当該地域の鉱山存在、並びに労働移動、津軽領内での銀精錬の実施が判明した。

それでは、入良川銀山をはじめ津軽領の鉱山が、全体的に把握できるような資料に登場するのは、何時のころであろうか。

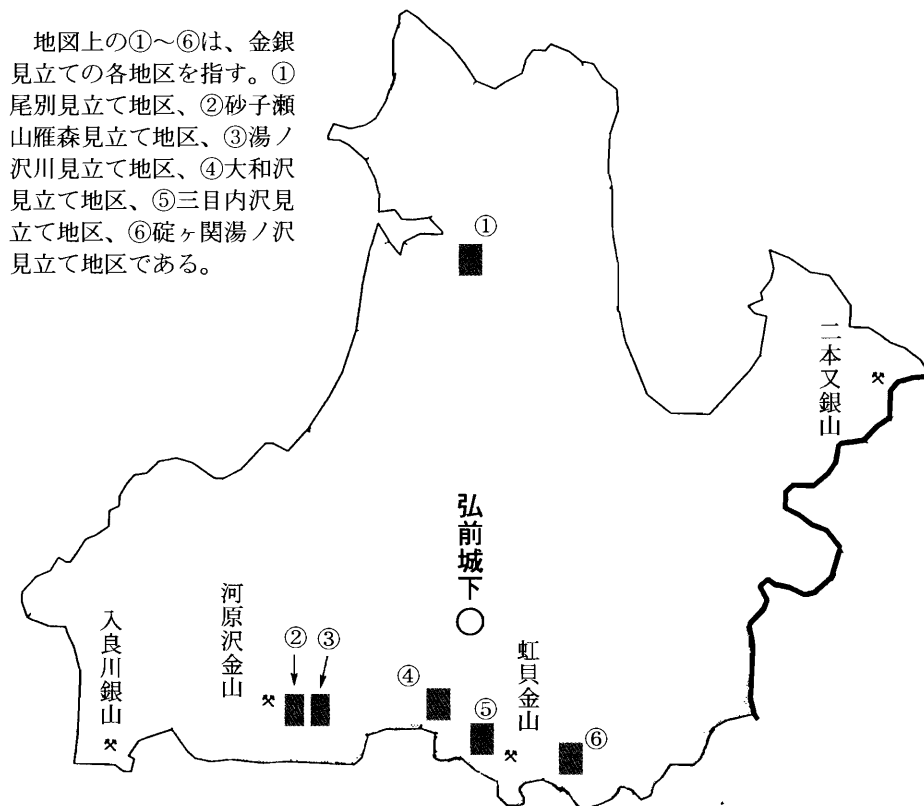
江戸幕府が慶長期に続いて国絵図の作成を命じたのは、正保元年（一六

四四）十二月のことであった（『好書故事』『近藤正斎全集』第三巻 第一書房 一九七六年復刻 所収）。正保二年十二月、津軽領で作成された「陸奥国津軽郡之絵図」（青森県立郷土館蔵、『県史近世Ⅰ』付図）が、幕府へ献上された。同絵図に、領内の各金銀山が描写されているのである。本稿では、『県史近世Ⅰ』付図に収録された同絵図をもとに検討することにした。

同絵図によれば、津軽領内には「銀山」「河原沢金山」「虹貝金山」の三金銀山が描かれている。地名がなく「銀山」とのみ記載のあるのは、大間越村から秋田藩境の向かう細い道の奥まった場所に位置しているので、地理的に見て入良川銀山である。「河原沢金山」は、砂子瀬村（現中津軽郡西目屋村）から岩木川沿いに南西に向かう細い道のこれも秋田藩境に近い場所にある。「虹貝金山」は、早瀬野村（現南津軽郡大鰐町）から平川沿いに南西に向かう細い道のこれも秋田藩境に近い場所にある。また「銀山」の肩書きに「近年者金不出申候」、「河原沢金山」にも「近年金不出申候」、「虹貝金山」にも「近年かね不出申候」とあり、いずれも近年は産金銀のない旨が記載されている。この記述が信用できるものかどうか、判断に迷うところである。同じく正保の「出羽国一国絵図」や「南部領内総絵図」にも鉱山の記載は明確になされているが、このような産金銀もしくは産鉛がないとの記述は、いっさい見当たらない。津軽領の特殊性なのか、あるいは貞享二年（一六八五）三月に同絵図を書写した時、つまり十七世紀後半にいたって出鉱がなかったから、新たに書き入れたものか詳細は不明である。

正保期の津軽領内で確認された金銀山は、右の三鉱山であって銀山は入良川のみである。また前掲「奥州羽州全図」に記された「河原」付近の金

地図2 前期津軽領鉱山と寛文期領内金銀見立て地区



地図上の①～⑥は、金銀見立ての各地区を指す。①尾別見立て地区、②砂子瀬山雁森見立て地区、③湯ノ沢川見立て地区、④大和沢見立て地区、⑤三目内沢見立て地区、⑥碓ヶ関湯ノ沢見立て地区である。

山とは、当絵図の「河原沢金山」を指すことは間違いなからう。「梅津政景日記」に見える寛永期津軽領の銀山とは、入良川銀山であることも確認されよう(地図2参照)。

絵図に見えるこれらの金銀山は、文献史料によっても確認される。慶安

二年(一六四九)四月「津軽領分大道小道磯辺路并船路之帳」(『弘市史近世1』一〇四九号)によれば、入良川銀山は「大間越より銀山迄式里半、此間大難所牛馬不通、是より先八秋田領」とある(同前九一三ページ)。「河原沢金山」は、「砂子瀬より川原沢金山迄三里、此間牛馬不通大難所、自是先大深山、但秋田領境山迄牛馬不通」(同前九一六ページ)、「虹貝金山」は「早瀬野村より金山鳥居野杉迄三里十三町、(中略)自是先大深山、但秋田領境山迄は難所、牛馬不通」(同前九一九ページ)と見える。三力所の金銀山は、いずれも秋田領に隣接して領内の深山幽谷に位置し、交通の難所であった。

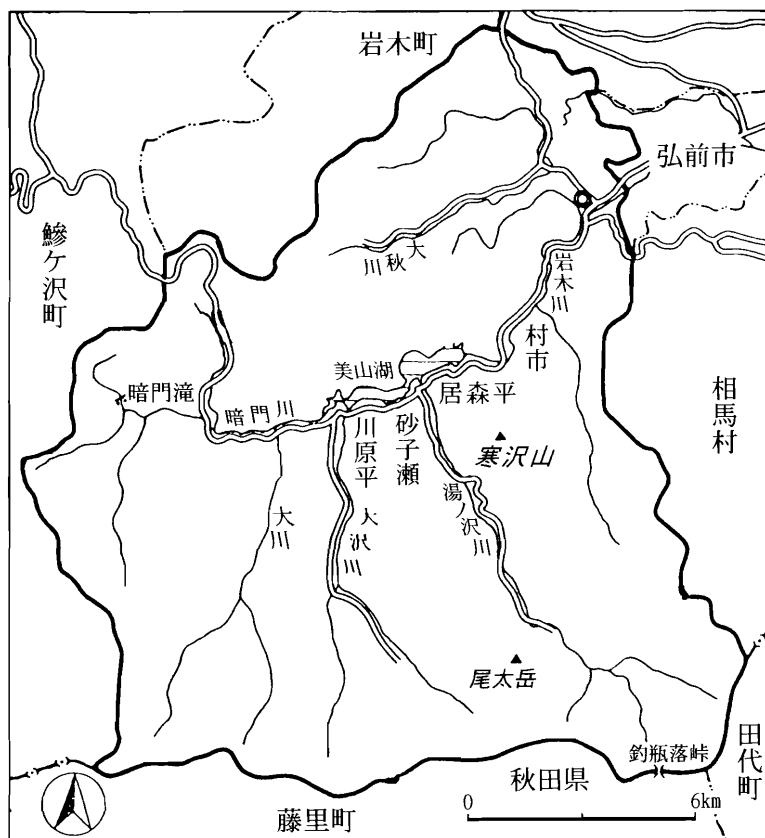
ところで河原沢金山の所在地については、従来一度も検討される機会がなかった。筆者も尾太鉱山にいたる湯ノ沢川の沢筋にある鉱山なのだろうと漠然と考えていた。しかし「山機録」をはじめ江戸時代の沢絵図を見ても湯ノ沢川の川筋には河原沢の地名が見当たらず、困惑していた。<sup>(10)</sup>

『目屋ダム建設記念 砂子瀬部落誌』(十和田岩木川総合開発協議会一九五九年)の藩政時代「奥目屋山沢図」では、湯ノ沢川の沢筋ではなく、同川の西側、大沢川を越えて、岩木川に注ぐ現大川の沢筋に川原沢の地名が見える。また『新撰陸奥国誌』第二卷(国書刊行会一九八三年復刻)四三八ページの川原平村の箇所、同村の金山は「南二里川原沢と云る処にあり、鉱窟三あれとも今産すること少し」とあり、湯ノ沢川ではなく大川の沢筋に発展した金山であった(地図3参照)。

ほかに津軽領内の鉱山としては、「盛岡藩雜書」(『弘市史近世1』三一六ページ)承応元年(一六五二)七月七日条に見える「二本また銀山」がある。それによれば、馬門まかど(現上北郡野辺地町)の者に申し付けて同銀山が、南部領なのか津軽領に属するものなのか見立てを下命したという。二

地図3 西目屋村の鉱山関係地図

当地図は、同村の現況を示したものである。昭和35年（1960）に完成した目屋ダム（地図中に「美山湖」と見える）によって、砂子瀬・川原平・居森平等の地域は一部水没した。そのため砂子瀬の中心部は、南側に移転した。したがって藩政時代の砂子瀬村は、現地点より北側に位置した。当地図は、盛田稔・長谷川成一責任編集『角川日本地名大辞典2 青森県』（角川書店 1985年）1,268ページ所収地図を参考に作成した。



本又は、津軽領狩場沢（現東津軽郡平内町）と南部領馬門の藩境そのものであり、この後、烏帽子山<sup>かりばさわ</sup>争論と称された藩境紛争が弘前・盛岡両藩で起こり、争論そのものは正徳四年（一七一四）に江戸幕府評定所の裁許によって決着が付いた。このような複雑な地域であったことから、盛岡藩では銀山見立てに慎重を期したのである。幕府の裁許状は表に二本又川の沢筋と烏帽子山の一带を描いており、裏面に裁許の文言が記録されている。<sup>(1)</sup> 表の絵図に「金山間歩」が描かれており、裏面の文書には、津軽領蟹田村の者が寛文九年七月から翌年四月まで、南部領大浦村の者が寛文十年十二月から翌十一年正月中旬まで採鉱をしたという（『県史近世1』五三三ページと口絵）。その金山間歩は、広さ六尺余（約二メートル）、深さ七、八間（約一三メートル）で岩山を掘り抜いたものであったという。承応元年の状況と完全に一致するとはいえないが、当時「二本また」の地域に金銀山が存在した可能性は高いといえよう（地図2参照）。

以上述べたところをまとめると、寛永〜慶安期すなわち十七世紀前半の津軽領においては、秋田藩領との境界地域に西から入良川銀山、河原沢金山、虹貝金山があり、南部領との境、烏帽子山の二本又川の沢筋に金銀山が位置したと見てよからう。入良川銀山、河原沢金山、虹貝金山の各鉱山からの産金銀が当時なかったという点については認めがたく、次章で論じる領内鉱山の開発において、さらに追究することにした。

## 二、津軽領の鉱山開発と領国貨幣の流通

前章で正保二年（一六四五）「陸奥国津軽郡之絵図」に描かれた津軽領内の三金銀山からは、当時産金銀がない、つまり正保期領内鉱山では稼行



していないとの書き入れが認められた。この記述が果たして正確なものか、前章では留保しておいたが、この点の解明から論を進めてゆくことにする。

京都銀座役人狩野七郎右衛門が幕府へ提出した「灰吹遣之国々より出申候灰吹丁銀に吹立申覚」によれば、寛文八年（一六六八）の時点で奥羽地方でも出羽国の秋田・米沢藩、陸奥国の弘前・会津・福島各藩で領国貨幣の製造・発行・通用が認められる（前掲伊東氏「近世初期の貨幣問題管見」二七九～二八二ページ）。津軽領でも「新極印灰吹」なる領国貨幣の存在が同史料によって確認され、前掲伊東・榎本・渡辺各氏の研究において津軽銀の実態と通用の具体的な様子が明らかにされてきた。本稿では、津軽領の領国貨幣そのものについてはこれら先学の業績に譲り、鉱山開発と領国貨幣に限定して言及することにしたい。

榎本氏の『近世領国貨幣研究序説』（東洋書院 一九七七年 二四～四一ページ）によれば、津軽領における領国貨幣は、寛文四年十一月六日の御定書に「次銀」と見えるのが初見であるという<sup>13</sup>。ついで領内の小役のほとんどが、領国貨幣としての津軽銀であるとし、次銀とは同じ領国貨幣でも銀の含有量が劣るもので、反対に品位の高いそれは「上銀」と称したとある。これらの領国貨幣は、領内の銀山からの産銀で製造されたもので、そのような産銀を期待できる銀山を持ち得ない大名領では発行・流通は望むべくもなかった。したがって当時、津軽領では貨幣として発行・流通可能な産銀量を継続的に供給・確保できる鉱山が存在したことを物語っているよう。

前述のように榎本氏は、津軽領の領国貨幣の初見を寛文四年十一月の御定書に求めていたが、『県史近世2』に収録された史料によって、次のような新たな事実が判明した。明暦二年（一六五六）九月二日の「白戸万右

衛門平川鮭川御役判紙請求状」（『県史近世2』六四六号）に、平川で小舟による鮭漁を依頼する藩士白戸氏が、昨年の鮭川役として「上銀拾匁」を上納するという内容が見える。明暦二年から寛文三年にいたる、一連の平川鮭川役に関する文書（同前六四七・六四八・六四九・六五〇・六六二・六六五・六六七号）には、上銀の納入を定めている。また万治四年（一六六一）四月七日の「小山庄太夫外深浦沖口出船許可請求状」でも、この「御役上銀六拾式匁」の上納を済ませたことが記述されており（同前六四一号）、同年五月一日の出船を求める許可請求状でも「御役上銀三拾目」を上納したとある（同前六四三号）。

以上のようなことから、榎本氏という領国貨幣流通の初見はさらに年代が遡るのであって、右の文書類からすれば、初見は明暦二年九月の時点であろう。したがって正保二年の国絵図にみえる、領内金銀山から金銀の産出がないという記述は、領国貨幣の流通状況からして、にわかには信じがたく、同領内での領国貨幣通用の様子や、寛永期の津軽領内銀山の稼行状況を勘案すると、金銀山は継続的に稼行していて、国絵図に見えるような産金銀がないという記述は再検討の余地があろう。筆者は、むしろ寛永期以降、川原沢・虹貝・入良川の金銀山を中心とした津軽領内鉱山は、領内で領国貨幣の通用可能な量を恒常的に供給できていたのではないかと、また正保期に津軽領内の鉱山がいつせいに稼行できないような事態にいたった、と判断するのは早計なのではないかと考える。

『秋田県史』第二巻 近世編上（秋田県 一九六四年）三二七～三二九ページによれば、全国的に見て金銀山に特に恵まれた秋田領においても絶えざる鉱山の見立てと開発が実施されており、それは津軽領でも同様であったと思われる。例えば「山機録」には、寛文元年、「太守公御入国アリ

テ国産ヲ改給フヨシ」とあり、四代藩主津軽信政が入国後、領内の殖産事業へ積極的な取り組みを開始して、鉱山調査にも乗り出し、その過程で偶然に尾太銀山を発見したという物語が掲載されている。次に述べる寛文二年から始まった、同藩による新たな領内鉱山の調査と開発は、初期の河原沢金山以来継続して実施してきた、領国貨幣の通用量確保を主眼とする鉱山政策の一環と見なしてよからう。

さて津軽領では鉱山の開発に先立ち、領内金銀山の見立てつまり調査と踏査を実施した。「弘前藩庁日記 御国日記」（弘前市立図書館蔵津軽家文書 以後、「国日記」と略記。なお『県史近世2』に収録された「国日記」は該当のページを掲げ、未収録の分については「国日記」とのみ記した）寛文二年十一月六日条に、弘前藩では、「金穿」白根伝吉・高橋兵助兩名に、砂子瀬山（現中津軽郡西目屋村）のうち雁森<sup>がんもり</sup>において金銀見立てを下命したとある（『県史近世2』六四ページ）。これは西目屋地区大沢川の流域調査であり、領内における金銀見立ての初見である。

翌三年四月には、次のように領内三カ所での見立てが命じられた（同前七三ページ）。「国日記」寛文三年四月二十三日条（同前同ページ）に、

一、湯口山之内佐渡沢より大和沢迄、金銀之見立て、其方共申付候、随分普請仕、過分々金体有之候ハ、急度注進可仕由、湯口村作兵衛・

同村久左衛門・同村助右衛門方へ折かミ遣ス、

とあり、湯口村（現弘前市湯口）の百姓に、湯口山の佐渡沢から大和沢<sup>おほさわ</sup>までの地域（現弘前市座頭石付近の山中と推定される）で金銀見立てを命じた。文中に普請をせよとあるので、ある程度坑道を掘削して十分な金銀採鉱の可能性があるならば、藩に注進せよというのである。

第二の調査地域は、同月二十五日に「尾辺地山之内瀧之上、北八田野沢

切、東八岩屋切、尾辺地沢中金銀之見立」（『県史近世2』七三ページ）と見え、現北津軽郡中里町尾別<sup>おっべ</sup>の尾別川上流の地帯である。湯口山と同様、「尾辺地村」の百姓に坑道を掘削させ金銀見立てをするようにと命じた。

第三のそれは、翌二十六日、「三免内沢中、大川落合より水上迄金銀見立」（『県史近世2』七三ページ）とあり、「三免内沢」（現南津軽郡大鰐町）すなわち岩木川と三ツ目内川の合流する地点から三ツ目内川の流域に沿った上流地帯を、前二地点と同様、金銀見立てをせよというものであった。ただし「三免内沢」の調査は、秋山・羽入という藩士に命じている。

四月下旬に下命した一連の金銀見立ての最後のものとして、弘前藩では最も金銀の産出を見込める、「目屋の沢」（現西目屋村の湯ノ沢川流域、深奥部に尾太岳が位置する）の調査を命じた。「国日記」寛文三年五月九日条には、次のように見える（『県史近世2』七三ページ）。

一、九日、目屋の沢・湯の沢・比崎より下、はつかう沢・下はつかう沢迄、小倉めあかし・長根・おふちやなは迄、金銀見立之折かミ砂

子瀬村市助・同村兵助・同村左衛門四郎・同村伝左衛門方へ遣ス、

主な地名として、「比崎」とは砥崎沢、「はつかう」は八光沢を指し、前掲「山機録」や同地域の沢絵図を参照すると、この度の調査は尾太岳に到達せず、その直前の沢までの金銀見立てであった。見立ては、砂子瀬村の百姓たちに命じ、形態は湯口・尾辺地の例と同様であった。なお各地域を明示したのが、地図2の①～⑤である。参照されたい。

これらの見立て作業は、あらかじめ金銀の発見がある程度見込まれる地域に焦点を絞ったもので、前年の砂子瀬山雁森岳、つまり大沢川流域の金銀見立てと同様の方針で実施されたのであろう。後で述べる延宝三年（一六七五）二月の、領内全域にわたる金銀銅山調査（国立史料館編『津軽家

『御定書』東京大学出版会 一九八一年 一七五・一七六号）とは、性格を異にしていた。それでは、弘前藩で実施された、寛文元年から延宝三年にいたる期間の金銀山開発について検討することにした。

「国日記」に見える、寛文元年から延宝三年にいたる期間の領内鉱山についての動きを、一覧にしたのが表1である。表1に見えるように、当時の領内鉱山は、寒沢金銀鉛山（表1のNo.1～4、8、16、21～24）、濁沢金山（No.5）、虹貝金山（No.6、7、10、12、20）、大和沢めくら坂銀山（No.9）・尾髪（神）銀山（No.11）、大間越銀山（No.14）、ひよう久金山（No.13）、碓ヶ関の湯ノ沢銀山（No.18）、寒沢馬の背鉛山（No.19）である。ひよう久金山については、所在地など詳細は不明。なかでも寒沢と虹貝の両鉱山には、寛文五年一月にキリシタン改めが命じられ、翌月には同改帳が作成された。これは両鉱山で働く鉱夫たちとその家族が集住形態をとり、キリシタン改めを実施せざるを得ないほどの人口規模に至っていたからにはかならない。他の鉱山にはキリシタン改め実施の形跡が認められないので、両鉱山の規模が群を抜いていたのであろう。虹貝金山は、正保国絵図にも描写され、前掲慶安三年の大道小道帳（『弘市史近世1』一〇四九号）にも記録されていたので、所在については改めて記すことはしない。

各鉱山の所在地を推定すると、次のようになろう。寒沢金銀鉛山は、居森平村（現中津軽郡西目屋村）の南側、寒沢の沢筋をのぼって、寒沢山に所在。寒沢馬の背鉛山は、居森平村（同前）の南方、寒沢鉱山からさらに南東側の馬の背峰である。濁沢鉱山は、川原平村（現中津軽郡西目屋村）南の大沢川の沢筋にあり、前掲『新撰陸奥国誌』第二巻四三八ページに、同村の金山は「本村の南一里十八丁濁沢の茶碗分と云処に在り、黄金を採るに茶碗を用しにより茶碗分の名ありと云り」と見え、これも前掲『目屋

表1 「国日記」に見える、寛文元年（1661）から延宝3年（1675）にいたる津軽領の金銀鉛山に関する記事一覧

No.	年 月 日	事 項	鉱 山 名
1	寛文1. 7. 8	寒沢へ横目派遣。	寒沢
2	寛文3. 4. 23	寒沢銀山の山先清右衛門間歩で高品位の鉱石を発見、掘り分けを下命。	寒沢銀山
3	寛文3. 4. 26	寒沢銀山の仙台五郎右衛門間歩で金15匁出鉱、掘り分けを下命。	寒沢銀山
4	寛文4. 6. 2	寒沢銀山で銀山祭。弘前神明宮の惣宮太夫派遣。	寒沢銀山
5	寛文4. 6. 17	にこり沢の白銀町八右衛門間歩で、金8分5厘出鉱。	濁沢金山
6	寛文5. 1. 23	寒沢金山と虹貝金山での吉利支丹改め実施の書付を奉行に渡す。	寒沢・虹貝金山
7	寛文5. 2. 8	虹貝金山から吉利支丹穿鑿の帳1冊呈上。	虹貝金山
8	寛文5. 2. 9	寒沢金山から吉利支丹穿鑿の帳1冊呈上。	寒沢金山
9	寛文5. 12. 8	新土手町の五郎右衛門、大和沢のめくら坂で銀山見立て。	大和沢のめくら坂で銀山
10	寛文5. 12. 8	虹貝金山から南条素庵、金鉱石を寄越す。	虹貝金山
11	寛文5. 12. 19	大和沢の尾神で銀山見立て。新土手町の小左衛門に米30俵を貸与し、開発をさせる。	大和沢の尾神で銀山
12	寛文6. 12. 4	越後の伝右衛門、虹貝金山で水抜普請。米3斗入りを30俵拝借後、死去。	虹貝金山
13	寛文7. 2. 29	ひよう久金山開発に、和徳町甚右衛門に蔵米40俵貸与。	ひよう久金山
14	寛文7. 10. 1	大間越銀山で、仙台の嘉右衛門、山子に殺害される。	大間越銀山
15	寛文8. 6. 1	外浜金山検使任命。	外浜金山
16	寛文11. 2. 12	寒沢銀山の銀山頭から、同銀山で金鉱石の献上あり。	寒沢銀山
17	寛文11. 3. 9	大和沢のうち赤根沢の金銀見立てを命じる。	大和沢のうち赤根沢
18	寛文11. 8. 18	土手町勘兵衛、碓ヶ関湯ノ沢にて銀山見立て。	碓ヶ関湯ノ沢にて銀山
19	寛文11. 9. 28	寒沢の馬の瀬（背）鉛山開発のため、角館金十郎へ蔵米3斗入り20俵を貸与。鉛で返却を命じる。鉛の値段は銀10匁につき3貫目とする。	寒沢の馬の背鉛山
20	寛文12. 閏6. 19	虹貝金山の三十郎平の乳井村長兵衛切り捨ての間歩再興を、土手町油屋又左衛門が願い出る。	虹貝金山
21	延宝2. 8. 6	寒沢の銀鉛山で、鉛1貫500目から銀6～7匁2分吹き。掘り分けを命じる。	寒沢で銀鉛山
22	延宝2. 8. 6	寒沢銀山出来につき、検分使派遣。山師清左衛門と久右衛門に米5俵宛下賜。	寒沢銀山
23	延宝2. 8. 10	寒沢銀山の検使帰弘。銀山の絵図を持参。藩主に披露。	寒沢銀山
24	延宝2. 8. 20	寒沢銀山から検使帰弘。金鉱石を持参。藩主に披露。	寒沢金山
25	延宝2. 10. 2	唐牛与右衛門、銅山から帰弘。	銅山
26	延宝2. 12. 1	唐牛与右衛門、銅山出来につき、調査のため比内へ出張。	銅山
27	延宝3. 2. 6	唐牛与右衛門、銅山奉行に任命される。	

ダム建設記念「砂子瀬部落誌」の藩政時代「奥目屋山沢図」に「にぎり沢」と記されている（地図3参照）。大和沢めぐら坂の銀山・尾神銀山については、次のように推定される。銀山見立てを行っためぐら坂については不詳。同所の尾神銀山は、現弘前市の南端、大和沢川の支流で尾神沢の沢筋、毛無山や苗代山付近に展開した銀山と考えられる。大間越銀山は、現西津軽郡岩崎村で入良川銀山を直接指すものか、もしくは付近の銀山であろう。碓ヶ関の湯ノ沢銀山とは、現南津軽郡碓ヶ関村の湯ノ沢一帯にある鉱山のひとつと推定される（地図2の⑥）。

表1に見える記事のなかで最も頻出する寒沢金銀山については、次章でさらに検討することにして、当時期の領内鉱山についての特徴をまとめることにしたい。前述の寛文二年十一月から翌年四月にかけての領内金銀山見立ての効果があったのか、大和沢における銀山の本格的な調査が行われており、また砂子瀬山雁森岳方面、大沢川流域の見立ての結果、濁沢の金山から金の産出も見込まれたようだ。また尾別地域の金銀見立てがなされていたが、No.15のように寛文八年には外浜へ金山検使を派遣しており、同藩では津軽半島一帯の鉱山調査に着手したと言えよう。

開発の担い手は、No.2の山先清右衛門をはじめとしてNo.3・12・14・19に見られる仙台・角館・越後の地名を冠した人物たちや、No.10の南条素庵は、山師であることは間違いない。なお「山先」とは、秋田藩の惣山奉行を務めた黒沢元重が元禄四年（一六九一）に著した「鉱山至宝要録」（『日本科学古典全書』第一〇巻、朝日新聞社 一九四四年 所収 一八ページ）によれば、鉱山の見立てを一番先に成し遂げた者で、「山中諸事の相談」をする重要な役であるという。

ところでNo.5・9・11・18・20の事例にも見えるように、開発の担い手

に白銀町八右衛門など弘前城下居住者と思われる人々がいることに注意が必要であろう。時期は若干さかのぼるが、慶安二年（一六四九）頃「弘前古御絵図」（弘前市立図書館蔵津軽家文書）は、十七世紀中葉の弘前城下を詳細に描写した城下絵図であり、城下屋敷所持者の職業を肩書きしている貴重な絵図である。同絵図によれば、城下西側の荒町（現弘前市新町）に、「山し」（山師）四名、「金穿」・「かねほり」が三名、座頭町下町小人町（現蔵主町付近）に「金ほり」一名、上長町に「かねほり」一名、大工町（現元大工町）に「山し」一名の名前が見える。この城下絵図から考えるに、No.5・9・11・18・20の町名を冠した人物は、おそらく山師・金掘りであったのではないか。大量の鉱山関係者が城下に居住していたのである、かれらが居住していた荒町は、城下西端で西目屋地区に通じる街道沿いに位置していた。これらの人々も、領内金銀山の見立てと開発に従事したのである。

No.2・3・21の寒沢銀山の記事に見えるように、経営は掘り分けと称して、山師・金掘りと藩とで取り分を、山主分と公納分に分ける、いわゆる「掘分山」の形態を採用したようだ。これは歩合制の山のことで、「荷分山」ともいった。またNo.11や13・19のケースに見えるように、藩では山師たちに蔵米を貸与して鉱山開発を実施させており、No.19の寒沢馬の背鉛山のように、貸与した蔵米を、鉛の現物で返却させようとしている。これは表1に見える他の鉱山も同様であったと考えられ、津軽領内の初期鉱山の開発と経営は、「掘分山」の形態で実施されたのであった。

ところでNo.25・26に「銅山」とのみ見える鉱山は、いったいどの銅山を指すのであろうか。No.25以前の事例には、銅山の開発と経営のことが全く見えないため、よく分からない。銅の産出が著しく、今後、銅山として

稼行を期待できたことから、役人の唐牛与右衛門は経営の手法を学ぶためか、もしくは鉱夫の徴用のためであろうか、鉱山の先進地域である秋田領比内へ出張しており（No.26）、ついで延宝三年二月には銅山奉行に任命された（No.27）。「国日記」元禄十三年十月二十四日条に、

一、先達而被仰越候萩原近江守様より御尋被成候銅出高之儀、御家老中<sup>中</sup>申達之致僉議候処、延宝元年秋田之角助と申者尾太銅山を見立、

天和二年迄十ヶ年之間銅掘申候得共、過分損料ニ罷成相止申候、

とあり、延宝元年に秋田の角助が「尾太銅山」を見立て、天和二年（一六八二）にいたる一〇年間、銅を採鉱したという。つまりNo.25・26に見える「銅山」とは、おそらく尾太銅山を指すと推定される。ここに初めて、尾太が登場したのである。

また寒沢をはじめ各鉱山で採鉱のために使用された鉄製鉱具は、どのようにして調達されたのであろうか。津軽領では、当時、有力な鉄山が確認されておらず、慶長十五年（一六一〇）の弘前城築城に用いられた鉄材は南部で購入し、南部鉄吹きが小国<sup>おくに</sup>・蟹田で製鉄をしたという（「津軽一統志」。「八戸藩日記」（八戸市立図書館蔵）延宝二年三月九日条によれば、八戸藩領久慈大野鉄山<sup>くじおの</sup>（現岩手県久慈市）で生産された新<sup>な</sup>（鑿）<sup>たがね</sup>が青森商人を通じて津軽領に入ってきており、他にも鍛・鉄材の移入がなされた<sup>18</sup>。このように津軽領内の鉱山では、八戸藩領大野鉄山からの新などの移入鉄製鉱具が、使用されたと考えられる。

なお本章を終えるに当たって付け加えておきたいのは、表1 No.4に見える寛文四年の寒沢における銀山祭の記事である。弘前城下では、城下八幡宮の神輿渡御にともなう祭礼が初めて実施されたのは、天和二年八月のことであり（「国日記」同年八月一日条）、寒沢銀山では弘前の城下町よりも

約二〇年以前に祭礼が開催された。年不詳「津軽領尾太并寒沢銀山図」（国立史料館蔵荒谷家文書）によれば、「喰森平村」（現西目屋村居森平）の南側の岡に社と「山神宮」の記名があり、おそらくこの山神宮の祭神を祀る祭礼と思われる。ここに寒沢銀山の鉱山町としての成長が伺われ、しかもこのことは、津軽領内で最も早い祭礼の実施とも見なすことができ、興味深い記事である。

### 三、寒沢銀山の稼行とその特質

本章では、寛文期津軽領内の金銀山の開発が、前章の表1に見えるように、主として寒沢銀山を中心として実施されたと考えるので、同銀山の稼行状況を検討することにした。これによって、津軽領の前期鉱山経営の実態が判明するものと思われる。

さて尾太鉱山の地理的な特徴の一つは、「山機録」にも見えるように、弘前城下から同鉱山までの距離が九里（約三六キロメートル）あり、深山幽谷、險阻な山々の「大難所」に位置したことである<sup>19</sup>。特に「冬山ノ稼ナラス」と、冬季は物資の輸送にも困難をきわめ、後に鉱石の製錬のために一帯の檜や雑木をことごとく伐採したこと、付近の山々は「裸山」となり、そのため絶えず雪崩の危険にさらされた（「山機録」をはじめ藩の記録に見える）。それにひきかえ寒沢銀山は居森平村の南側、弘前城下からは五里（約二〇キロメートル）の距離であり、距離的に城下と近いことが早期開発に幸いした（地図3参照）。

前章でも若干触れたように、寒沢銀山は、山先が清右衛門であって他に仙台的五郎右衛門らの山師が採鉱に従事していた。表1のNo.2・3の記事

で、寛文三年（一六六三）四月、寒沢銀山の清右衛門と、仙台の五郎右衛門の間歩からは金一五匁（約五六グラム）が献上され、「掘分」で開発することが下命された。ついで寛文十一年二月にも、銀山頭甚三郎から金鉱石が献上された（表1のNo.16）。延宝期に入ると、寒沢銀山の銀生産は盛りを迎えたようで、延宝二年（一六七四）八月、同銀山では本格的に銀精錬に着手し（表1のNo.21）、藩主にも披露して、銀山としての稼行を藩が正式に認めた。ついで検使の千葉源右衛門を派遣して同銀山の検分を行い、山先清右衛門と久右衛門には、「御米五表ツ、」が下賜された。「国日記」延宝二年八月十日条に、

一、寒沢銀山<sup>上</sup>去ル七日、千葉源右衛門見分二遣し候処二、昨晚罷歸ル、銀山之様子委書付絵図仕、銀体土共二今朝持参、則御前<sup>上</sup>遂披露候之処二御意被成候ハ、万事為念之候間、吉村場左衛門・千葉源右衛門申付差越候へと被仰出候、

と見え、検使の千葉は寒沢銀山の状況を記した書付と絵図、銀鉱石類を持参して藩主津輕信政へ披露に及んだ。右の「国日記」の記事にある書付と絵図とは、次に掲げた資史料である。このように当時の記録に見える資史料が現存することは珍しいことなので、紹介することにした。

絵図の方は、現在、「寒沢銀山之図」（弘前市立図書館蔵津輕家文書三〇×四三センチメートル 請求番号TK五六九一九）の史料名で、また書付は同絵図に添付する形で架蔵されている。同図の写真（写真2）と図示したもの（図1）を掲げたので参照されたい。また書付とは「寒沢銀山開発の覚書」（『弘市史近世1』一〇六三号）として、すでに紹介されているが、内容が重要なので、ここに改めて原本校正をして一部誤植を訂正したものを左に掲げた。

#### 覚

一、弘前より寒沢御銀山迄道五里、同所家数三拾軒、人数式百八拾人余罷有候由、

一、右之者共先年之古まぶ普請仕、口すき仕候由申候、

一、右之寒沢より今度之御銀山はつかう沢迄、大図道屯里半、牛馬之通不罷成候、

一、はつかう沢御山小屋五軒、人数七拾人余罷有候、

一、御堀<sup>堀</sup>わけ今七日之暮六つよりつちを立堀申候由、同八日之朝六つ迄に荷数式拾八荷出申候、同六つより九つ迄拾荷出申候由、是ハ不足二御座候間、其段吟味仕候へハつるわきかたく罷成、不足二出申候由申候、

一、右御堀わけ之まぶより、荷屯<sup>荷</sup>荷とい吹仕見申候へハ、銀八匁式分五厘、右之銀よりなまり屯賣目出申候、

一、同御堀わけ荷数、則荷を半分被召上候様二仕度由山仕共申上候へ共、とかく荷二ハ善悪有之紛敷候間、売出シ銀子二而差上ケ可然由申付候、

一、右之荷共最早売出シ申度由申候へ共、今程ハ新御山之義二候へハ、人少二候間、延引候て人多二仕、せりあい之入札仕らせ、其上うかい候て、売出シ可然由申渡候、

一、御山奉行木村十左衛門屯人二而寒沢よりはつかう沢新御山へ通二ハ不自由二御座候、以上、

延宝貳年八月十日

千葉源右衛門

右の覚書を要約すると、次の六点にまとめられよう。

①寒沢銀山は、弘前城下から五里の距離にあり、延宝二年の段階で、

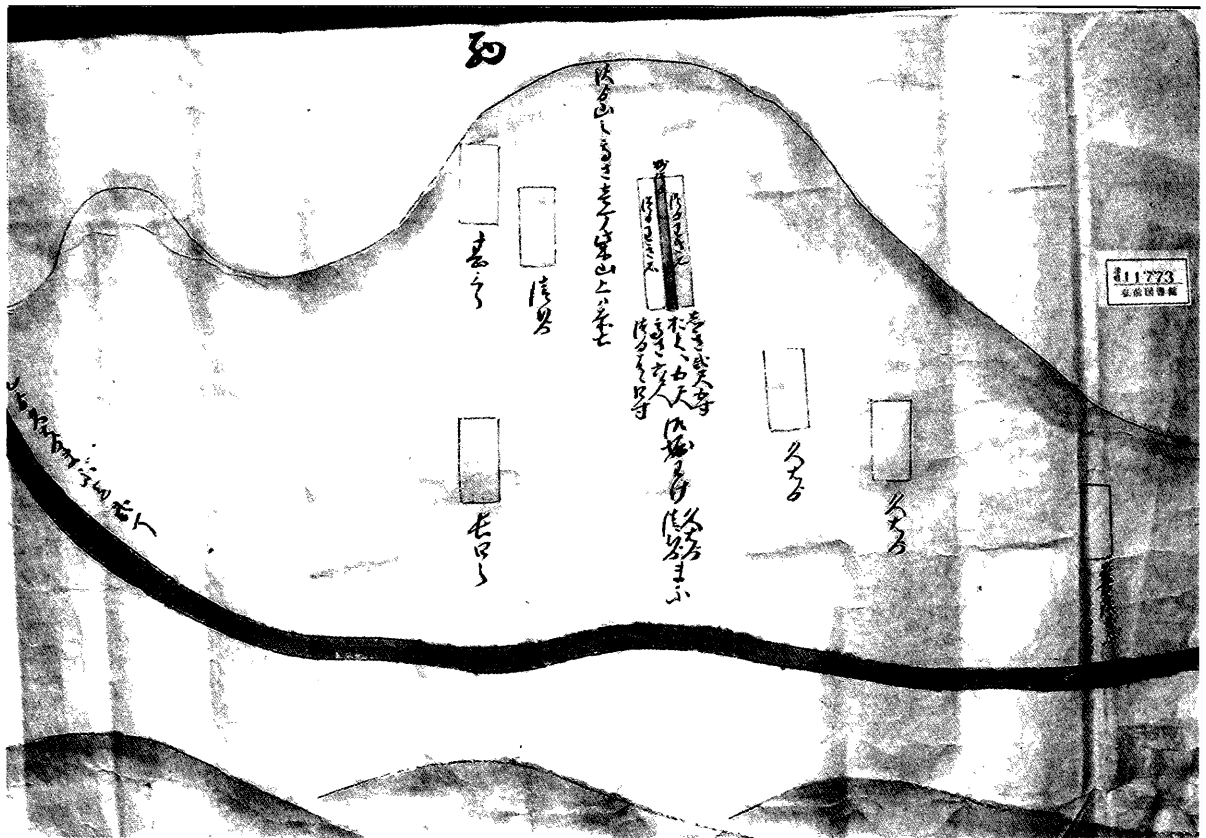


写真2 寒沢銀山之図

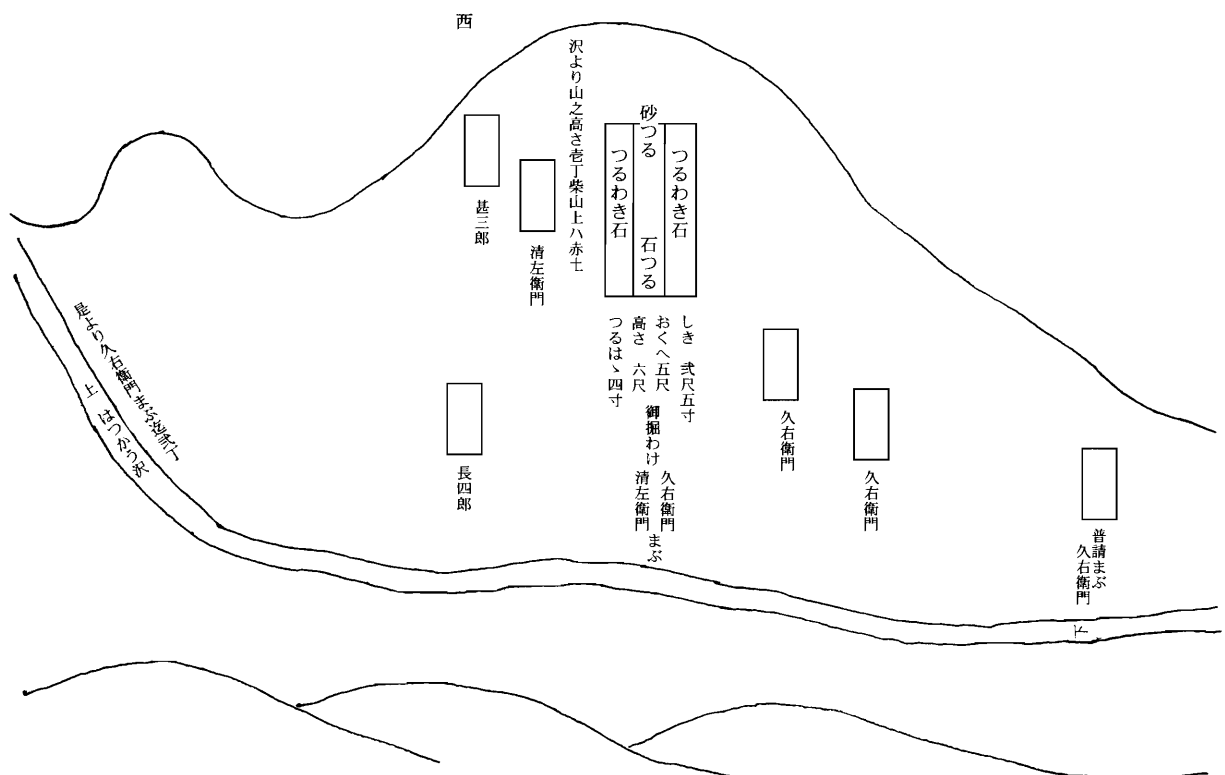


図1

寒沢銀山には家数が三〇軒、鉱夫二八〇人余がいて、「先年之古まぶ」（間歩Ⅱ坑道）を立て直し、採鉱をして何とか口過ぎをしているという。

②新たな銀山として「はつかう沢」（八光沢、湯ノ沢川の上流、八光沢の沢筋にある鉱山）の開発に乗り出した。八光沢山は、山小屋五軒、鉱夫が七〇余人である。寒沢から八光沢までは、だいたい一里半の距離があり、牛馬の通行ができない。

③寒沢では、八月七日から八日にかけて掘分方式で採鉱を実施し、合計三八荷の鉱石を掘り出した。しかしそれでは不足であり、原因を調査したところ、「つるわきかた（鉷脇硬）く」と銀鉷脈の周囲が堅固だったので採鉱に支障が出たという。

④この「御堀分之まぶ」の鉱石を「とい吹」（問い吹き、試験的に精錬すること）してみたら、一荷（おおむね一〇貫目）から銀八匁（約三〇グラム）と鉛一貫目（約三・七キログラム）が得られた。

⑤山師たちから、藩と山師による掘分荷取り分の割合を五〇%としたいと要望があった。荷中の鉱石の品位にはバラつきがあるので、鉱石を売却した額で各々の取り分を分配することにした。

⑥鉱石の売却をしたいが、新鉱山なので人が少なく、売却をしばらく延期して人数を集めて「せりあい之入札」Ⅱ競争入札を実施し、それで売却をしたらどうか。

写真2「寒沢銀山之図」は、右の寒沢銀山の様子を忠実に描写したものと考えて良からう。図1によれば、①にある「先年之古まぶ」とは、図中に見える「清右衛門」、「甚三郎」、「長四郎」、二カ所の「久右衛門」・「普請まぶ 久右衛門」の各間歩を指し、「普請まぶ 久右衛門」とは、掘削

中の坑道のことである。また②のように、新たに八光沢銀山の開発に当時着手していたことが分かり、同図にも湯ノ沢川の上流を意味する形で「上はつかう沢」と見え、弘前藩が次第に寒沢筋から湯ノ沢川流域の陰阻な山岳地帯へ開発の手を伸ばしつつあったことが、同史料から読みとれよう。

図の中では③の状況、つまり新たな間歩の普請をより具体的に記録している。新間歩は、清左衛門と久右衛門の両名が担当する間歩で、「御堀わけ」で実施する。鉷脈の幅は、四寸（約一二センチメートル）、上方が「砂つる（鉷）」―砂状で、下方が「石つる（鉷）」―石状、覚書中に「つるわきかた」とあるように、鉷脈の周囲は岩状であったようだ。新間歩の規模は、高さ六尺（約一・八メートル）、横幅が二尺五寸（約七六センチメートル）、奥が五尺（約一・五メートル）、縦長の長方形の坑道であった。浅い坑道で、露頭掘り、つまり表面採鉱に近い形であったと推測される。しかし④に見えるように、銀と鉛の品位は比較的高かったらしく、藩庁は期待したようだ。⑤にあるように掘分方式を採りつつ、鉱石の品位にばらつきがあることを指摘して、鉱石を売却した金額で山師と藩で取り分を決めることとし、売却を延期した。さらに競争入札を行うために、可能な限り入札参加者を多く募ることにしたという。

翌延宝三年二月、山先の清右衛門は、数年来自分の採鉱している坑道をさらに四〇間（約七二メートル）ほど掘り進めたが、資金が続かなかったことから、弘前城下の土圭屋四郎兵衛に協力を求めた。四郎兵衛を通じて藩庁に蔵米一〇〇俵の拝借を求め、許可がおりて採鉱を進めることにしたという（『国日記』同年二月十五日条）。寒沢銀山では、このように短期間の採鉱のほかに、数年来の開発を継続するために山師が城下商人と共同して開発に当たり、場合によっては藩庁に借米を願い出ることがあった。



なお「国日記」延宝四年七月六日条に、清左衛門の掘り進めている間歩について、次のような言及が見える。

一、山先清左衛門間歩普請之儀、無余力者故普請はかまいらす、大方及退転之段、唐牛与右衛門・吉村場左衛門委細入御耳之処、数年尽粉骨大分之盤石三百間余鑿入抽精力之処、右之仕合不便思召、御米

二百表被下之旨、弥右衛門<sup>正</sup>被仰出、則与右衛門・場左衛門<sup>正</sup>申渡之、

山先清左衛門は前述のように延宝三年の時点で、四〇間まで掘った坑道を藩庁からの蔵米援助を得てさらに掘り進めたところ、右の記事に見えるように、七月には三〇〇間（約五四五メートル）にも達したとある。しかし、ここで資金が行き詰まり、清左衛門間歩の掘り手たちは同間歩から引き退いてしまったようだ。藩としては、寒沢銀山開発に尽力した清左衛門の功績を認めて蔵米二〇〇俵を下賜したという。ここに見える清左衛門間歩のように、山師の資金が続かなくなれば、蔵米貸与による援助はしても、高位の品質を持つ鉱石採鉱の見通しがなくなれば、最終的に藩では援助を打ちきり、山師の責任としてその間歩の開発を停止したようだ。

以上のような点から、十七世紀後半の津輕領における鉱山開発と経営の一端が判明した。基本的には、「掘分山」方式を採用し、短期間で採鉱の成果を上げて荷数を増やし、試し吹きの結果、良質の山であることが判明すると稼行を続行させた。さらには競争入札で鉱石の販売を行い、それを荷主と藩とで分配することにした。前掲「鉱山至宝要録」二二ページ（注17を参照のこと）にも、「堀分と云ふは、半分づゝ御公儀と、舗主、荷売銀を分る故の名なり。」と、鉱石を販売した代金を藩庁と舗主とで折半すると見えるので、寒沢銀山も当時の他の銀山において行われていたと同様の方式を採用していたのである。さらに広範囲かつ地底深く掘り進めるの

に、山師たちは城下商人と協力関係を持ち、ひいては藩庁に彼等を通じて蔵米貸与を出願するにいたった。しかし開坑当初には、蔵米の貸与などによる幾分かの援助をしても、あくまでも間歩の掘削と開発は山師の資金及び責任とされ、藩は将来に見込みのない間歩は援助打ちきりという手段で処理をした。

「国日記」元禄十年（一六九七）六月四日条に、尾太銅山並びに寒沢・川原沢には、当時山師が三〇〇軒ほど居住していたというが、延宝期を経過して寒沢銀山の産銀量は減少し、山勢の凋落は著しかった。宝永期に入ると、寒沢銀山の開坑当初から山先として活躍していた清左衛門の山師一族も、次のように採鉱をあきらめて藩庁へ同銀山の返上を願い出た。「国日記」宝永二年（一七〇五）四月九日条に、

一、寒沢山師孫左衛門・久兵衛・文右衛門書付二而山奉行山本三郎左衛門・小山内新右衛門を以鞆負迄申立候は、寒沢御銀山、古来御山先<sup>正</sup>清左衛門存生之内相働、御銀山繁り御為仕候処、清左衛門死去、倅共<sup>正</sup>右之御山御預被成置、段々先年穿捨之土洗流一日暮二相続申候、段々米高直二罷成、近年は商人方より仕入一切不仕候、依之山中古敷一日暮働成兼及渴命候体罷成候、大切成御銀山相守罷有候得而は、御為差上候儀も無之渡世送兼候、御山差上在家<sup>正</sup>罷下一日暮をも仕度候、御山諸普請方仕度、望之者出来候節、山所古来穿残方々水敷と成申候所<sup>正</sup>拙者共能存候二付、何方二罷有候而も御銀山古敷銀穿残敷数有所之先立可仕と奉存候、拙者共普請は不及力候付、右之通御山差上候様奉願旨申立候二付、遂僉議候処、久兵衛儀拝借米四拾式俵有之由、右御山差上候儀願之通、拝借米は段々致上納候様可申付之由、鞆負より小山内新右衛門方<sup>正</sup>申遣之、

とあり、清左衛門死去の後、息子たちが跡を受けて同銀山を預かったが、清左衛門存命の時に繁栄を誇った同銀山も山勢をついに回復することはできなかったことを開陳した。産銀の激減にともない、掘り捨ての鉱石を吟味したりしたが、坑内に残っている古い舗では産銀も期待できず、米価の高騰もあり、それに連れて商人たちとの取引もいっさいなくなった。さらには飢えに苦しんでいる有様で、大切な銀山の保全もかなわないので、藩庁へ銀山を返上したいと述べている。拝借米はいずれ返却するとあるので、久兵衛をはじめとする山師たちも藩庁からの蔵米貸与によって、銀山を稼行していたのである。このように宝永年間に入って、寒沢銀山開坑以来継続してきた山先清左衛門を頂点とした山師集団による同銀山は、この時点に至って採鉱を停止することになった。<sup>20</sup> 初期以来進めてきた、津軽領金銀山開発の一つの終わりとみてよからう。これ以降、「国日記」にみえる寒沢銀山の再経営については、まず水抜き普請の着手から開始しており、初期の在り方と相違した形態が認められる（例えば「国日記」宝永五年一月二十五日条の記事など）。

なお右願書に、「山所古来穿残方々水敷と成申候所」と見える点に注意を喚起しておきたい。寒沢銀山にも水敷みずしき水没した坑道が方々にあり、それを山師たちはよく知っているといるという。前章の表1 No.12に、虹貝金山で越後の伝右衛門が水抜普請を実施したことが見えており、この度の願書にも寒沢銀山での水敷のことが見えるので、津軽領の鉱山でも坑道の掘削が深度を増すに連れて、坑内の湧水に悩まされたのである。

ところで尾太鉱山が本格的に成立し稼行する以前の、寒沢銀山全盛期において鉱山の経営や精錬などの実務を取り仕切る「御台所」や蔵・番所などは、いったいどこにあったのであろうか。「国日記」元禄十年九月十九

日条に、「九月十六日之夜、木戸ヶ沢御銀山御台所並御蔵頭・御目付番所共三軒焼失仕候由、御役人より注進申候、右三軒共明家二御座候、」と見え、空屋ではあったが、銀山の御台所、御蔵頭の屋敷、御目付番所など三軒が木戸ヶ沢に存在していたとある。

木戸ヶ沢とは、藩政後期の「從弘前至尾太銅山行程之図」（国立史料館蔵津軽家文書）によれば、居森平村の西側、寒沢の沢筋と湯ノ沢川との中間点に位置する。寒沢銀山に近接した場所であり、当時、弘前藩が金銀山開発に専念していた濁沢金山のある大沢川流域、河原沢金山のある大川流域へも、砂子瀬・川原平両村をつなぐ脇道を経由して、アクセスが比較的容易であった。弘前藩では、延宝四年からの尾太銀銅山開発に当たっては、改めて木戸ヶ沢に鉱山町の建設を企図したのであった（「国日記」延宝四年十一月一日条、延宝五年三月「おつふ御町屋敷御絵図」弘前市立図書館蔵津軽家文書）。

#### 四、寒沢銀山から尾太銀銅山へ

第二章において、寛文期弘前藩の領内金銀山見立てⅡ調査・踏査は、有力な鉱脈が期待される地域に限定して実施されたことを明らかにした。その結果、寛文期には寒沢銀山をはじめ濁沢金山など、初期国絵図に見える河原沢金山などの金銀山とは異なる鉱山の発見もしくは開発がなされ、活況を呈してきた。しかし延宝年間に入り、尾太銀銅山の本格的な稼行を期待できる状況が現出した時、藩は寛文期と異なる鉱山政策を打ち出した。

「金銀銅惣御山奉行」の設置と、鉱山の全領内的調査である。

延宝三年（一六七五）二月九日、弘前藩は唐牛与右衛門を従来の銅山奉

行から「金銀銅惣御山奉行」に任命し、領内鉾山を御手山（藩の直支配）とし、唐牛の代官支配を認め、精錬・冶金に関する事業を一任して役銀の賦課権も付与した（前掲『津軽家御定書』一七四号）。翌十日には、唐牛与右衛門の金銀銅惣山奉行就任を全領内に告げ、町在ともに百姓・町人が草刈りや木こりに出た時に、金銀銅山を想定させる「石土色」を発見したならば在方では肝煎へ、町方では町奉行に即刻報告せよと命じた（同前一七五・一七六号）。さらに「国日記」同三年二月十五日条によれば、唐牛は金銀銅山だけでなく鉛山の「差図」も追加して下命され、津軽領内における非鉄金属の鉾山全てを管掌することになった。

領内全域にわたる鉾山調査の効果があつたのか、延宝三年五月、藤崎村（現南津軽郡藤崎町）と村市村（現中津軽郡西目屋村）の百姓二名に「ひさき」（湯ノ沢川流域の砧崎沢）にての銅山見立てを許可し、蔵米一〇俵を給与して銅の採鉾をさせ、村における諸役免除の特権まで与えた。翌四年七月、尾太銅山の開発に従事していた鈴木彦兵衛を下（しも）の切（きり）（岩木川下流域）・外浜（現青森市・東津軽郡）の金銀山・水精（晶）山の検分に派遣して（「国日記」延宝四年七月十八日条）、津軽半島全域の鉾山調査に従事させた。

さて尾太鉾山が銅山としては勿論のことながら、銀山として脚光を浴びるようになったのは、延宝四年八月のことであった。「国日記」延宝四年八月十八日条には、「丸山・中之沢御手山普請間歩」から二荷で銀一〇六匁（約四〇〇グラム）が得られ、前掲の鈴木彦兵衛が弘前に持参して披露に及び、高品位の銀山として、山先の「覚之助」（この人物は、第二章で触れた、延宝元年に尾太銅山開発に着手した「秋田之角助」と同人物）に蔵米三〇俵を祝儀として与えたという。「丸山」とは、湯ノ沢川流域、現

尾太岳の中腹丸山沢に位置する。「中之沢」とは、尾太岳の内、丸山よりも北側、中の沢に開坑された間歩と思われる。享保七年（一七二二）以前と推定される「鉾山集落古絵図」（品川弥千江編著『西目屋村誌』西目屋村役場 一九九一年 一〇六―一〇七ページ所収）に、「おつふの中之沢銀御山」と見え、開発の手はいよいよ尾太岳本体に入ってきたのである。「山機録」や後代の各尾太絵図にも書き入れられた、最初の開坑口を指す「姥舗」（うばしき）は、あるいはこの「丸山・中之沢御手山普請間歩」を指すのかもしれない。

ついで、延宝四年十月には「御銀山」（この時期から尾太鉾山を単に「御銀山」と称するようになり、藩内に同銀山が広く認知されたことを示唆している）から、唐牛与右衛門が初めて「銀子十貫調入五箱」（約一八七キログラム）を藩主津軽信政に献上し、藩主自ら与右衛門に褒美を下賜した（「国日記」同年十月二十二日条）。翌十一月には、銀山での商売を企図する者に、十分一役を賦課するか、もしくは二カ月毎に運上を命じるか、与右衛門の判断に任せることにした（同前同年十一月一日条）。これは後の資料によれば、十分一役の徴収に落ち着いたようである。尾太は、鉾山町が形成されるほどの山勢を持つようになったのであり、藩としてもその統制に乗り出すことになった。

さて「国日記」延宝四年十一月九日条に、「おつふ御銀山見立候覚之助儀、銅山両所共見立惣而御山出精之儀、唐牛与右衛門申立之趣達御耳、御米二十俵被下之、来年巳年より右之山さき勤候中納五十俵宛可被下之旨被仰出、則与右衛門申渡之」と見え、尾太の銀山と銅山両所を見立てた「覚之助」（これは前出の秋田の角助を指す）は、唐牛与右衛門の申立によって褒賞を受けた。さらに同人を「山さき」と位置づけて、来年から開

発に従事することを下命し、その間は五〇俵の蔵米下賜も申し渡した。同日、銀山への杉・檜などの諸材木納入に関して、村市番所での十分一役徴収を取り決め、間歩普請用の材木確保を図るとともに、諸役徴収のルールも決めた。ここに尾太銀銅山の開発の主体が藩によって決定され、銀・銅の本格的な採鉱に着手することになった。

これに先立って、同四年七月、「銅御山」についての「見配」と「手廻」、すなわち尾太銅山の管理と経営に抜群の手腕を発揮したとして、鈴木彦兵衛に対して鳥目・酒などの褒美が下賜された（『国日記』延宝四年七月一日条）。さらに鈴木は、先述の山先覚之助褒賞の後、同様に同年十二月、「御山見立」に厚い尽力をしたとして、時服や銀子を拝領した（同前同年十二月八日条）。後述のように、銅山経営一切の取り仕切りを下命された鈴木は、前掲「鉱山至宝要録」一八ページに見える「山廻り」「当番」と呼ばれた山奉行に直属する役人であったようだ。同書によれば、この「山廻り」の手腕が鉱山の盛衰を決めたという。

周知のように、尾太は深山幽谷に位置して冬季は積雪が多く稼行が著しく困難であったので、弘前藩では本格的な採鉱開始、いわゆる「鑓立」は翌年からとしたようだ。そのための態勢固めを延宝五年に入ってから行い、後述のように同年二月、唐牛与右衛門に「御銀山支配」を命じ、銅山開発の仕様、鉛山の普請、大坂での銅売却などの責任者を決めた（『国日記』延宝五年二月十六日条）。三月には、「をつふ御銀山極印之文字」を「尾太」の二字に決定した（同前同年三月十五日条）。ここに尾太銀山からの産銀は吹屋で精鍊して「尾太」を刻印し、領内貨幣の一つとして通用することになった。

同五年四月、尾太銀山では「鑓立」のお祝いが開催され、その時の入用

品が、「国日記」同年四月十六日条に書き上げられている。それによれば、箱肴・時服は唐牛与右衛門へ、山神に五色の御幣二つ、お祝い酒、昆布、干鮭、塩引き、三〇〇人分の肴物、餅米、大豆、小豆、熨斗等が準備された。ここに三〇〇人分の肴物とあるのが目を引く。当時、同人数ほどの金掘りが、尾太山に集結していたのではなからうか。ここに同銀銅山の正式な開坑がなされ、津軽領内における本格的な稼行が認められよう。これは従来の寒沢銀山やその他の鉱山には見られない開坑形態であり、尾太銀銅山開坑に対する弘前藩の並々ならぬ意気込みを汲み取ることができよう。

もう一つ今までの鉱山とは相違する大きな点がある。唐牛与右衛門は、前述のように金銀銅山惣奉行に任命された時に（後に鉛山も管轄）、「吹分に申付候事」と精鍊・冶金の分野までも職務の範囲としていた。与右衛門は、延宝元年六月に江戸へ出張しており（『江戸日記』同年六月二十四日条）、同三年五月には上方へ出張している（『国日記』同年五月十二日条）。また同四年正月、江戸の出張から国元に帰って、三カ月後の四月四日、再度、唐牛与右衛門に「金銀吹分之儀」が紙面をもって申し渡された（『国日記』同日の条）。『国日記』同年四月六日条によれば、特に同三年五月の上方出張は、「銅山様子為聞合」すなわち銅山稼行についての調査のためであったという。延宝五年二月十六日、弘前藩では唐牛与右衛門に次のように申し渡した（『国日記』同日条）。

一、唐牛与右衛門御銀山支配之誓詞仕度由之事、

一、鈴木彦兵衛儀倅御当地に差置、当八・九月比罷登、自分之用事相済罷下度由之事、

一、銅御山普請延引、同御山を請負候者彦兵衛才覚にて差下可申儀、御参府中可被仰出候事、

一、去年大坂<sup>江</sup>登置候銅払可申儀右同、

一、鉛山年々普請いたし、鉛御藏<sup>江</sup>入可申事、

一、与右衛門儀御用有之間、御銀山仕廻次第可罷登事、

右の申渡によれば、唐牛は銀山支配を一任され、鈴木彦兵衛は請負山師の手配など銅山の経営に責任を負っていたようで、尾太山全体の統括と支配は唐牛が取り仕切っていたが、銀山は唐牛が、銅山は鈴木とその息子が担うという、役割分担をしていたようだ。加えて領内の産銅は、津輕領から大坂へ廻漕・販売されていたことが判明し、これは大坂の銅市場に津輕領の銅が組み込まれ、この後、上方市場へ恒常的に領内銅を廻漕する体制の成立でもあった。また鉛山の開発も進めた結果、藩の鉛蔵に蓄積がなされていたという。銀の精錬には大量の鉛を消費するので、このことは領内における銀の精錬・冶金システムが整いつつあることを示唆している。

延宝六年と推定される「尾太鉾山銅吹日記」（弘前市立図書館蔵岩見文庫）は、尾太銀銅山が当初において最も山勢が興隆した時期の貴重な記録である。同日記は、解説が困難であったことなどから、従来あまり知られていない史料であるが、これについては改めて分析の機会を設けて内容の紹介と同山の経営状況を考察したいと考えている。本稿との関わりから、同日記に記録された次の重要な点を指摘しておきたい。

同日記の延宝六年四月十三日条に、滝沢間歩での出鉛によって精錬を実施したことが述べられており、

なんばしほり 四月十三日

一、鉛貳百四十枚壱枚貳貳六七百目ほと御座候か、銀ハ壱枚二五匁二も有間敷候、何も申、これハ滝沢の銅より出鉛二而御座候、

という。この記事は、尾太鉾山で含銀銅から銀と銅を分離する「南蛮絞<sup>（3）</sup>」の冶金技術が行使されていたことを明示している。また尾太鉾山には、

同日記によれば、「なんば大工」は、同大工頭が二名と同大工八名、計一〇名の「南蛮絞」りの冶金技術者がいたのである。なお秋田藩では、安永年間から籠山銀絞所<sup>（4）</sup>（現秋田県山本郡二ツ井町）で「南蛮絞」りが実施されたといわれる（二ツ井町史編集委員会編『町史資料 加護山製錬所』二ツ井町 一九九五年）。これが事実とすれば、津輕領では、秋田領よりも約一〇〇年以前に新たな冶金技術が導入されていたことになる。

このような新技術は、どのようにして尾太鉾山に入ってきたのであろうか。近世前期にあつて秋田藩や盛岡藩と比較し、鉾山開発と経営において後進藩であつた弘前藩では、本稿で明らかにした十七世紀後半からの全領内的な鉾山調査と開発の過程で自らの後進性を痛感したと思われる。唐牛与右衛門が秋田領比内に出張し、近隣各領の鉾山調査を実施し、さらに各地の山師を積極的に領内鉾山開発に従事させて、開発と経営に力を注いだことは、今まで見てきたところである。また延宝五年七月、当年は他国からの金掘り人足の呼び寄せを延期することを申し合わせており（『国日記』延宝五年七月二十日条）、これは逆の見方をすれば、それまでは採鉾のための人集めを積極的に行っていたことを示している。なお同七年四月には「銀山御用」として大坂で四〇人を雇用して来国させた（同前延宝七年四月十二日条）。これらの人々は単なる鉾夫ではなく、山師もしくは吹屋などの技術者であつたと推定される。招致したこれらの人々のなかに、「南蛮絞」りの技術者がいたことは当然考えられるであろう。しかし筆者は大坂で雇用された四〇人の以前に、この技術が伝えられた可能性があるのではないかと考える。

当時、「南蛮絞」りの技術は大坂の泉屋（住友家）から銅屋仲間や各銅山へ伝達されたといわれ、領内に招致した山師たちからも津輕領へ伝えられたのであろう。しかし、前述の延宝三年五月、「銅山様子為聞合」つま

り銅山稼行に関わる調査に上方へ出張した唐牛与右衛門が、精錬・冶金にも責任を負っていたので、その際に泉屋もしくは大坂の銅屋仲間たちと接触して、新技術導入の先鞭を付けたのではないかと推察する。「国日記」

元禄十三年（一七〇〇）十月二十四日条に、天和二年（一六八二）以降、尾太銅山の山勢に衰えが見え始めたとき、山先の秋田の角助が撤退し、その後「大坂泉屋又三郎」なる人物が、津軽領内の町人二階弥三左衛門と組んで尾太銅山の再開発に着手したとある。

江戸幕府は、寛文八年（一六六八）、オランダ商館に対して銀の輸出を禁止し、ついで金銀の輸出を抑制する意図から、銅輸出に重点を移し、貞享元年（一六八四）十二月、市法貨物仕法を廃止して御定高制度を設けた。さらに銅の輸出を盛んにするため、元禄八年には、御定高の枠外に銅のみを対価とする銅代物替貿易を許可することになった（太田勝也『鎖国時代長崎貿易史の研究』思文閣出版 一九九二年）。ここに、銅が日本からの最大の輸出品に躍り出たのであった。住友泉屋は、延宝から元禄にかけて銅貿易とともに備中吉岡銅山など各地の銅山開発や京・江戸・長崎店の出店を図るなど、積極的な経営に乗り出していた（末岡照啓「近世前・中期における住友の経営構造」一『住友史料館報』第二四号 一九九三年）。このような動向のなかで大坂泉屋又三郎は、住友泉屋と関わりを持った人物と見なし得ないか。彼が再開発を許可された背景には、既に延宝期に唐牛を通じて大坂住友泉屋とのパイプが存在したからなのではなからうか。<sup>24</sup> いずれにしても、鎖国下の貿易体制のなかで大幅な銅需要が見込まれた時期に、津軽領の産銅は大坂・長崎廻銅のシステムに組み込まれ、その過程で尾太銀銅山の本格的な稼行の下地が形成されたのであった。

表2 「寒沢之内御銀銅山御絵図」に見える鉱山初見

No.	鉱山名	史料の初見	所在地の河川
1	さぶ沢銀山	寛文3年4月	寒沢の沢筋
2	はつかう沢鉛山	延宝2年8月	湯ノ沢川
3	ひさき銅山	延宝3年5月	湯ノ沢川
4	にこり沢金山	寛文4年6月	大沢川
5	かハラ沢金山	正保国絵図	大川

おわりに ― 延宝四年「寒沢之内御銀銅山御絵図」の世界 ―

弘前藩の金銀銅惣山奉行唐牛与右衛門の書き上げになるという、延宝四年（一六七六）「寒沢之内御銀銅山御絵図」（請求番号M七四）が、弘前市立図書館蔵津軽家文書に架蔵されている。当山絵図は、痛みが激しく、かつ大型（一五二×一六八センチメートル）であるため、従来余り注目されてこなかったもので、参考に供するため当絵図の写真（写真3）とそれを図示したもの（図2）を掲げた。

問題は、当絵図が何をあらわそうとしているかである。筆者は、延宝四年という年代に着目したい。すなわち、当絵図は、尾太銀銅山が本格的に開発される直前の、湯ノ沢川・大沢川・大川流域の、いわゆる西目屋地区の鉱山の実相を描写した鉱山絵図と判断する。図2に見える「尾太山」本体には、金銀銅山の記述がなく、これはいまだ尾太岳に間歩普請Ⅱ開坑、採鉱の事業がなされていないことを表現しているよう。図中に見える金銀銅山の初見は、表2に示したとおりである。表2に見えない「たきの沢銅山」は、前掲延宝六年「尾太鉱山銅吹日記」に銅山として稼行している様子が記録されている。「いたちもり銅山」は、享保七年（一七二二）以前と推定される前掲「鉱山集落古絵図」に、「いたち森銅御山」と見え



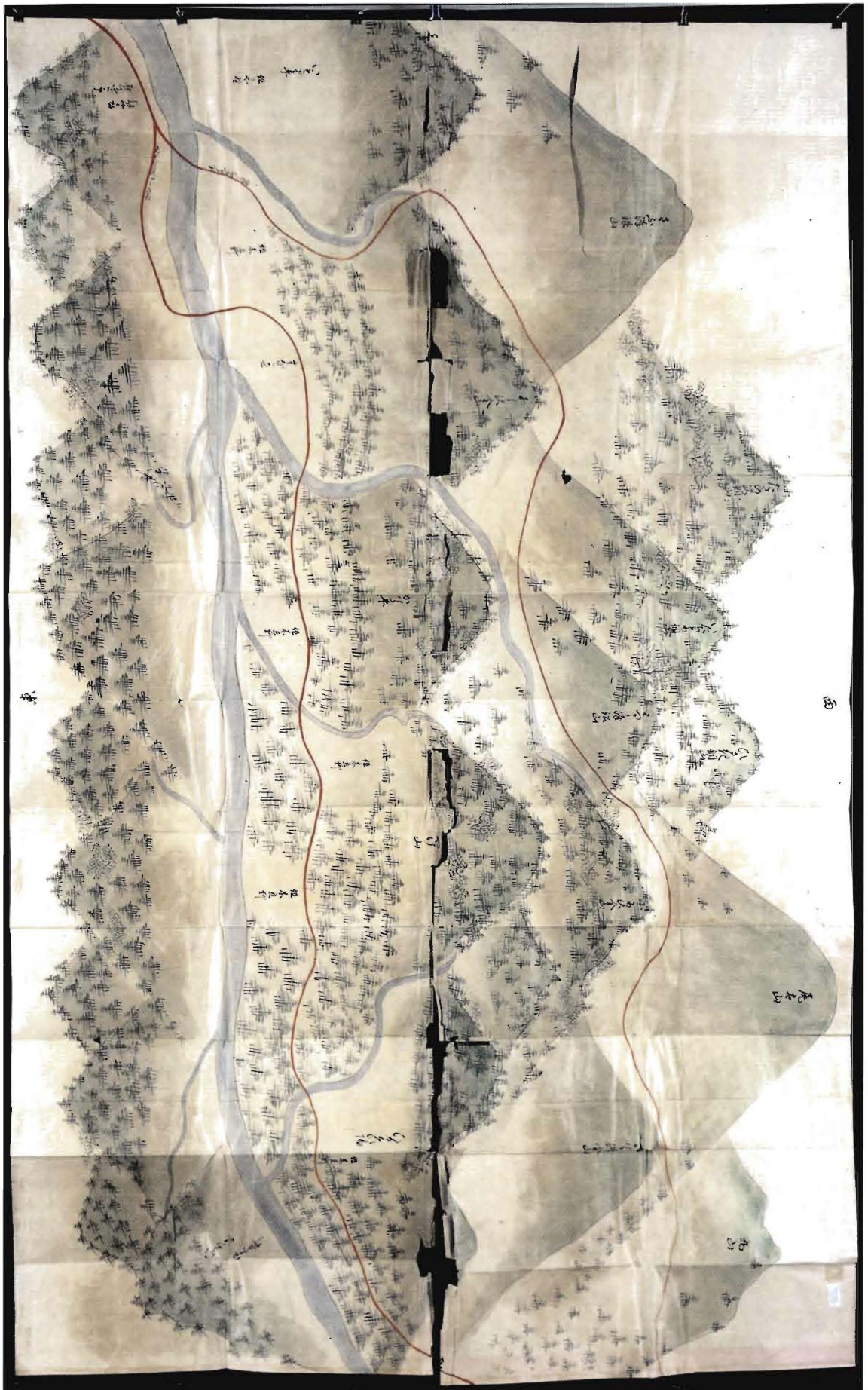


写真3 寒沢之内御銀銅山御絵図 (図中の東・西は表記が逆で間違っている)

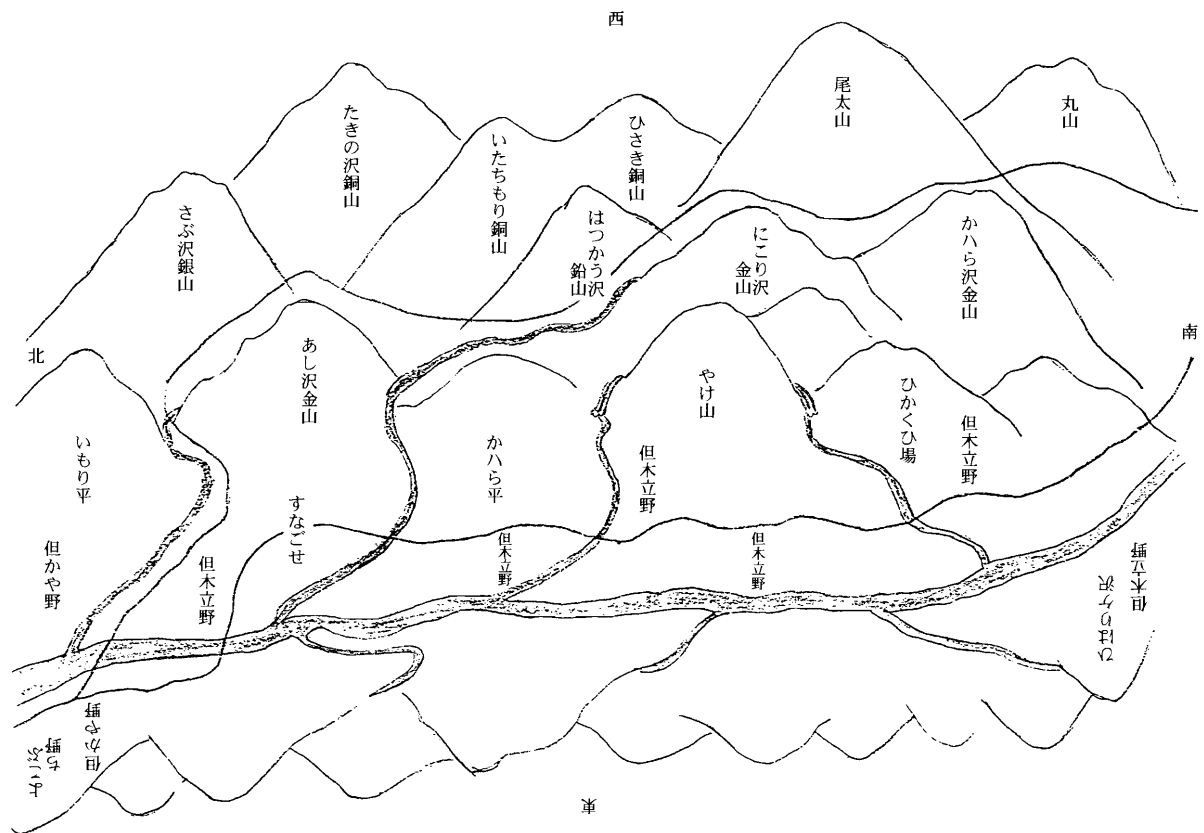


図2

る。「あし沢金山」は、史料では確認できない。この三山を除くと表2に見える各鉱山は、尾太銀銅山が本格的な開発に着手する前に稼行していた山々であり、寒沢銀山をはじめとする尾太稼行以前の有力鉱山が図示されているのである。つまり当鉱山絵図は、弘前藩で掌握し稼行させていた、尾太開発直前の西目屋地区鉱山の世界だったと考えられよう。

津軽領鉱山については、「はじめに」においても述べたように、従来、領国貨幣との関わりをなかで触れられることはあっても、例えば古典的な業績である小葉田淳『日本鉱山史の研究』（岩波書店 一九八一年）や個別の鉱山を数多く取り上げた同氏『続日本鉱山史の研究』（岩波書店 一九八六年）をはじめとして、ほとんどの研究書において言及されることがなかった。延宝四・五年の尾太銀銅山開発以前にあつては、研究史はいっそう薄いものであったといっても過言ではなからう。

それでは、本稿において明確にできた点を次にまとめることにしたい。

「津軽一統志」慶安三年（一六五〇）条に見える寒沢尾太銀山の開坑とその時点から津軽領鉱山が開始したという説は、かなり問題があり、すでに寛永期において西目屋地区の河原沢金山、大間越地区の入良川銀山の稼行が認められる。また慶長十三年（一六〇八）、江戸幕府の命で佐渡金銀山から北奥羽地方と松前にいたる鉱山へ大量の金掘りたちが派遣されて、新たな鉱山を開いたという事実は、当該地方における新金銀山開発に拍車をかけるものであった。

そのような動向を踏まえて、寛永〜慶安期すなわち十七世紀前半の津軽領においては、国絵図・大道小道帳などの史料に、秋田藩領との境界地域に西から入良川銀山、河原沢金山、虹貝金山が確認され、南部領との境、烏帽子子の二本又川の沢筋にも金銀山が認められるのである。また河原沢



金山も、現西目屋地区大川の沢筋に所在したと推定される。

領国貨幣に関する資料を手掛かりに考察した結果、最も古いもので明暦二年（一六五六）の川役判紙請求状に、領国貨幣による役銀徴収の事実が確認された。当時、その背景には領国貨幣である上銀・次銀の領内通用を可能にした銀の産出量が当然存在したはずであり、それを保証する領内銀山の稼行がなされていたと考えられる。寛文期に入って、領内鉾山の見立てⅡ調査がピンポイント的に実施され、寒沢銀山、虹貝銀山ではギリシタⅢ改めが実施されるほどの、金掘り集団の集住がなされていた。寛永・慶安期には知られていなかった、新たな鉾山開発の実施されたことが、「国日記」などの史料に見えるのである。山中の山師たちだけでなく、弘前城下居住の山師・金掘り衆もその一翼を担ったのであった。

当時の領内銀山とその稼行形態は、次のようにまとめられよう。経営の形態は、御手山すなわち藩の直支配であって、弘前藩では山師や商人に経営を委託する請山の方式を採用しなかった。当時最大の銀山であった寒沢銀山では、「掘分山」という藩と山師の両者で、採鉾した鉾石を販売した額を折半する形式をとっており、これは他の鉾山でも同様であったと考えられる。また鉾などの鉄製鉾具は、八戸藩領久慈大野鉄山で生産されたものが領内に移入され、各鉾山で使用されたと考えられる。津軽領の鉾山は、他領にこれらの鉾具や鉄材の供給を仰ぐ稼行形態であった。

寒沢銀山では、基本的に「掘分山」方式を採用し、短期間で採鉾の成果を上げて荷数を増やし、試し吹きの結果、良質の山であることが判明すると稼行を続行させ、競争入札で鉾石の販売を行い、それを山師と藩とで分配することにした。坑道をよりいっそう地底深く掘り進めるのに、山師たちは城下商人と協力関係を持ち、ひいては藩庁に彼等を通じて蔵米貸与を

出願した。しかし開坑当初には、蔵米の貸与などによる幾分かの援助をしても、あくまでも間歩の掘削と開発は山師の資金及び責任とされ、藩は将来に見込みのない間歩は援助打ちきりという手段で処理をした。延宝期に入って山勢の衰退が著しくなった寒沢銀山では、「鉾山至宝要録」に見えるような当時の慣例に従って、宝永二年（一七〇五）、開坑以来の山先清左衛門一族が御山返上という事態にいたった。衰退の原因は、「水敷」すなわち坑道の水没によるものと推定される。

弘前藩では、延宝三年から全領内に鉾山調査を下命するとともに、その過程で各地の山師を積極的に領内鉾山開発に従事させて、開発と経営に力を注いだ。延宝四・五年からの尾太銀銅山の本格的な開発は、同三年からの領内全域にわたる広範な金銀銅鉛山の調査と唐牛与右衛門の金銀銅惣山奉行就任によって強力に推進され、それは「南蛮絞」りという新たな精錬・冶金技術の導入をも図るものであった。

また津軽から大坂への廻銅が開始したが、これは幕府のオランダや中国に対する銅貿易政策のもとにあって、大坂の銅市場に津軽領の銅が組み込まれ、上方市場へ恒常的に領内銅を廻漕する体制の成立でもあった。これらの試みは、寒沢銀山をはじめとする、藩政成立期以来の津軽領鉾山開発の政策とは本質的に異なる性質の開発形態であったといえよう。換言すれば、初期における河原沢金山から寒沢銀山に至る領内鉾山開発の主眼は、津軽領内の領国貨幣の生産・鑄造にあったが、延宝四・五年からの尾太銀銅山の開発は、右の状況に加えて、鎖国下の貿易体制での銅需要に基づいた稼行態勢も視野に入れたものであった。ここに、弘前藩における寒沢から尾太にいたる領内鉾山政策の移行が認められ、寒沢銀山以来の連続・不連続の各側面はあるにせよ、我々は尾太銀銅山開発が、弘前藩の鉾山政策

の画期となったことを全国市場の面からも確認できるであろう。

最後に、「はじめに」において、伊東多三郎氏の古典的業績に見える津軽領内鉾山の所在地について疑問を呈しておいたが、本稿では十七世紀領内鉾山について、所在も含めて基本的な歴史事実の確認ができたと思われる。加えて榎本宗次氏などによる、従来の各見解を是正することもできたのではないかと考える。本稿におけるいくつかの基礎作業が、平成十六年度に刊行を予定している『青森県史 資料編 近世3 津軽2』の編纂に、いささかの貢献ができれば幸いである。

## 注

(1) 「津軽編覧日記」(弘前市立図書館蔵八木橋文庫) 承応二年(一六五三)八月朔日条に、「信義公尾太金山へ御出御覽被遊候、」と、弘前藩三代藩主津軽信義が、尾太金山へ巡行したことが記録されている。他に関係記録がないため、真偽を確認できないが、慶安三年の寒沢尾太銀山開坑記事と一連のものと考えられる。

(2) 伊東多三郎「近世初期の貨幣問題管見」「近世貨幣史の一問題」(『近世史の研究』第五冊 吉川弘文館 一九八四年 所収)や榎本宗次『近世領国貨幣研究序説』(東洋書院 一九七七年)、渡辺信夫『幕藩制確立期の商品流通』柏書房、一九六六年)等がある。右の他に近世尾太鉾山の概略を示した拙稿「陸奥国尾太鉾山に関する一知見」(『日本歴史』第六〇〇号 一九九八年)がある。

(3) 伊東氏は、主として旧『青森県史』第一巻(青森県 一九二六年)に依拠して、津軽領の鉾山開発の状況を論じている。本文に引用したなかで、「寒沢の湯口・三目内沢・大和沢・尾太・濁沢・中泊等の金銀山の稼業が盛んになった」の箇所は、大いに問題がある。

右の文は、寒沢の地域に湯口・三目内沢・大和沢・尾太・濁沢・中泊等の金銀山が点在したように受け取られかねないのであり、滝沢氏の論著も、そのように誤解した記述になっている。例えば湯口は、現弘前市湯口であり、三目内沢は現南津軽郡大鰐町と、寒沢のある西目屋地区とは、相違す

る。詳しくは、後述の各鉾山の考証をご覧いただきたい。

(4) 伊東多三郎氏の各藩の領国貨幣を扱った研究としては、「水戸藩成立期の鉾山と貨幣」(『細川小倉藩の鉾山と貨幣』(『近世史の研究』第五冊 吉川弘文館 一九八四年 所収)があり、また加賀藩のそれを扱った小葉田淳『貨幣と鉾山』(思文閣出版 一九九九年)がある。

(5) 成立期藩境の問題を扱った研究としては、拙稿「近世初期東北大名の領知高」(『日本歴史』四一七号 一九八三年)、福井敏隆「元和・寛永期津軽藩の家臣団について」『大日本古記録 梅津政景日記』の分析を通じて、「(『弘前大学國史研究』八四号 一九八八年)、本田伸「北奥羽における藩領域の形成―南部領鹿角通の境争論と事例分析―」(沼田哲編『東北』の成立と展開―近世・近現代の地域形成と社会―)岩田書院 二〇〇二年)などがある。

(6) 佐渡金山から奥州・松前への鉾夫派遣に果たした大久保長安の役割や、幕府の初期鉾山政策については、土谷紘子「徳川政権の成立と金銀山―鉾山間における移動と交流から―」(『弘前大学國史研究』一一三号 二〇〇二年)がある。

(7) 「西道金山」については、本文でも掲出した寛永期「奥州羽州全図」の他に、正保四年(一六四七)「南部領内総絵図」(『県史近世1』付図)にも、「西道金山」との貼り紙がある。白根金山と並んで南部領主要鉾山の描写であるにも関わらず、『角川日本地名大辞典3 岩手県』(角川書店 一九八五年)・『角川日本地名大辞典5 秋田県』(角川書店 一九八〇年)や『日本歴史地名大系3 岩手県の地名』(平凡社 一九九〇年)・『日本歴史地名大系5 秋田県の地名』(平凡社 一九八〇年)に記載が見当たらない。『梅津政景日記』慶長十九年十月十四日条に「白根」と並んで「さいたう」との地名がみえ、これが同金山の呼称とみてよからう。いずれも鹿角郡に所在。

なお元禄四年(一六九二)に開坑した別子銅山以前に、住友泉屋が稼行していた銅山の一つとして「西堂」銅山の名が、「出羽之内稼申山」という史料に見え(『泉屋叢考』第二輯 一九八七年 二三―二四ページ)、十七世紀末には、このように記名されていたことが分かる。

(8) 最近刊の川村博忠編『寛永十年巡見使国絵図日本六十余州図』(柏書房 二〇〇二年)所収の寛永国絵図は、同書の解説二一―一五ページによれば、巡見使御用に供するため、各大名領では慶長国絵図を元にして寛永期の領

内絵図を描き、江戸幕府に提出したという。『寛永十年巡見使国絵図日本六  
十余州図』二九ページに陸奥国の北部が掲載されており、津軽領では、「す  
なこせ」（砂子瀬）村から「河原沢」村への道があり、行き止まりの「河原  
沢」の付近に「金山」がみえる。「河原沢」村の地名は津軽領内に存在しな  
いので、川原平の誤記なのであろう。ただし当時、河原沢金山が著名であ  
ったことから、このように川原平を河原沢と称したともいえるようか。

なお前掲同書同ページに、南部領の鉱山も描かれていて、岩手山の西側  
に「西道金山」「槇沢金山」が記されている。前掲「奥州羽州全図」の「檜  
山金山」はあるいはこの「槇沢金山」と同じ鉱山であろうか。

(9) 拙稿「慶長・元和期における出羽国の社会状況―山落・盗賊・悪党の横行  
と取締り―」（注5の沼田哲編『東北』の成立と展開―近世・近現代の地  
域形成と社会―所収）において、出羽国の雄勝郡院内銀山をめぐる最上  
氏由利領と秋田藩との状況について論じた。

(10) 西目屋村農林建設課の課長村元博敏氏のご教示により、川原沢の字名が現  
在でも同村大川付近に残っていることが判明した。同氏には記して感謝申  
し上げたい。その他、西目屋地区の地域的情報については、三上源四郎  
『陸奥国津軽郡西目屋村のあゆみ』（私家版 二〇〇〇年）を参考にした。

(11) 『野辺地町史』史料編 第二集（野辺地町 一九九一年）に収録された藩境  
裁許関係史料に「古まぶ」「金まぶ」と記されている。なお同裁許状と絵図  
は、津軽（弘前市立図書館蔵）・南部（盛岡市中央公民館蔵）双方に同じも  
のが残存しており、同様に金山間歩が描かれている。

(12) なお榎本氏は注2の著書三四―三五ページにおいて、弘前藩では銀遣いが  
主流で銭遣いは次第に増してきたとしている。「国日記」寛文元年（一六六  
一）八月朔日条に「一、錢座御目見御進物高麗馬氈・御菓子杉重」「（県史  
近世2）四八ページ）と見え、詳細は不明だが、弘前藩で錢座を招請した  
形跡があるので、領内では銭遣いへの動きがあったようだ。

(13) 金銀の産出があっても、領内貨幣として通用させるにはそれをさらに精錬  
し銀貨にする技術が必要なのは当然である。それら冶金の仕事を担当のが、  
当時吹屋と呼ばれた技術者集団であった。「国日記」寛文二年十二月五日条  
に、弘前城下で「吹屋長左衛門」と上長町・下長町の町人たちの金銭出入  
りがあったことが記されており（『県史近世2』六五ページ）、当時、吹屋  
家業に従事していた職人が城下に居住していたことが分かる。彼等が領内

貨幣の鑄造に関わった可能性は高いと思われる。

(14) 「金穿」白根伝吉とは、おそらく南部領の白根金山で金掘りとして鉱山労働  
に従事していた者と推定する。津軽領に入領して、あるいは当時移行が確  
認される寒沢銀山で銀の採掘を行っていたのではなからうか。弘前藩では、  
そのような実績のある金掘りに砂子瀬山の見立てを下命したのである。

(15) 雁森は、『新撰陸奥国誌』第二巻 四三七ページによれば、大沢川の最上流  
の秋田境に位置する雁森峰を指すという。したがって、この時に金銀見立  
てを実施したのは、湯ノ沢川地域ではなく、同川の西側にある大沢川の流  
域であったようだ。

(16) 弘前藩が、領内全域にわたってキリシタン改めを実施したことが分かるの  
は、「国日記」寛文四年四月十三日条においてである（『県史近世2』九三  
―九四ページ）。『如例年』とあるので、毎年実施していたのであろうが、  
この記事が初見。この後は、例年四・五月に実施していたよううで、寒沢・  
虹貝両鉱山のキリシタン改めも、領内全域にわたるキリシタン改めの一環  
として行われた。

南部領では、寛永十三年（一六三六）にキリシタン改めが実施され、「金  
ほり」一二名が摘発された（『県史近世1』三六〇ページ）。

(17) 本文中に掲げた「鉱山至宝要録」（『日本科学古典全書』第一〇巻、朝日新  
聞社 一九四四年 所収）二一ページには、掘分山の解説として、次のよ  
うに記している。なお左の文中の「堀」は「掘」とすべきだが、原文のま  
まとした。

堀分の山も、普請して鉋に付る時、掛砂持参して、山奉行へ披露する時、  
検使出て鉋に鑿角打、四つ留口に金格子結び、掛砂持参する事、運上山  
に同じ。昼夜堀たる荷の売口、二百目より堀分るとも、三百目より堀分  
る共、前方より其山の定あり、其定の通りに売たる時は、半分御公儀へ  
指上、残り半分は舗主取る也。定より上の分は、少しの端銀成とも、半  
分は御公儀へ指上、半分は舗主取。定の内に売れば、何程にても御公儀  
へ少しも不指上、皆舗主取る也。堀分と云ふは、半分づゝ御公儀と、舗  
主、荷売銀を分る故の名なり。堀分の舗口は、口を付てより子々孫々ま  
で、其舗を持て、余人へ渡す事なし。若、其舗に金無くして御公儀に指  
上るか、中間にて余人に渡すは、格別の事なりと知るべし。切取の内、  
又運上淨取したる内にも、売荷有る間は、検使付置、荷売銀高何程と能

々吟味すべし。堀分の鋪と荷売銀の定めなきも、やすければ公儀へ少しも上る事なければ、弥々検使を付置き、油断すべからず。

また堀分山に関する本稿の理解は、荻慎一郎『近世鉾山社会史の研究』（思文閣出版 一九九三年）に依拠している。

- (18) 当時、鉄の生産地であった久慈大野鉄山では、タタラ製鉄が行われており『久慈市史』第二巻通史 近世 一九九三年 第六章第四節「鉄産業の成立」、寛文期以降、八戸藩からは津軽領だけでなく盛岡藩領・秋田藩領などへも同地産の鉄材・鉄製品が広く流通していた。津軽領へは、「八戸藩日記」寛文八年三月二十八日条に、鉄を八戸藩領から津軽領へ移出する記事が初めて見え、それ以降、鐵などの農具も、鉾と並んで津軽に移入されている。北奥における大野鉄山産の鐵や鉄などの流通に関しては、浪川健治「鉄と農具——一七世紀北奥の生産力発展と地域関係——」（渡辺信夫編『近世日本の都市と交通』河出書房新社 一九九二年）がある。

- (19) 「鉾夫雑談」巻之四（秋田県公文書館蔵）に、尾太鉾山がいかに險阻かつ氣候が厳しい場所にあったかが記されている。それによれば、同山に臨番した役人で彼等の頭領を「御大頭」と称したが、同山の苛烈な氣候のため御大頭の家も烈風によって吹き倒され、そこで「姥鋪」の近くに別に洞窟を掘って、そこに居住し銀鉾の吟味もしたという。その場所を「御大頭屋敷」と称していると記録している。

- (20) 注17の「鉾山至宝要録」一八ページによれば、「山見立たる者の子孫は代々山先なり」と、山先は世襲の役であった。さらに同書二一ページには、「堀分の鋪口は、口を付てより子々孫々まで、其鋪を持て、余人へ渡す事なし。若、其鋪に金無くして御公儀に指上るか、中間にて余人に渡すは、格別の事なりと知るべし。」とあり、山先の鉾山は藩へ返上するのが習いであったという。清左衛門の子孫が、寒沢銀山を藩へ返上したのは、当時の慣例に従ったものであった。

- (21) 町方と在方に発令された御定書は、『津軽家御定書』一七五号が在方へのもので、町方は一七六号である。両者は文言が若干相違しており、在方に出された御定書を左に示そう。

一、今度唐牛与右衛門金銀銅惣御山奉行被仰付候、就夫在方之者草かり・木こり仕候節、野山に而金銀銅山など少成共見立候ハ、早々其所之肝煎方申立、御代官中より与右衛門方注進可申候、何にものよらず

右之石土色見立候ハ、以後続不申候共、申立候ものそこつ成間鋪候、右之通御代官中可被相触候、以上、

延宝三年二月十日

御郡奉行衆

在方は、発見した百姓から肝煎、代官、金銀銅惣山奉行の唐牛与右衛門へというルートだが、町方は、町人から町奉行へ、そして金銀銅惣山奉行へとなっている。前日の御定書の第四条に代官支配の権限を唐牛に認めたのは、在方からの見立て報告を郡奉行を経由しないで、ただちに唐牛に届くように配慮した結果であった。

八戸藩では、延宝七年八月、領内の各山で金・銀・鉛・銅・水晶・辰沙・緑青などの鉾物を見立てるように、盛岡の町人市郎右衛門に依頼している（「八戸藩日記」同年八月十七日条）。弘前藩が藩権力によって、全領民を巻き込む形で鉾物の搜索を命じたのとは、相違している。

- (22) 『西目屋村誌』一〇六ページでは、「鉾山集落古絵図」の年代を「寛文の頃」としている。しかし、「国日記」享保七年七月二十九日条によれば、享保七年（一七二二）、津国屋藤八によって新たな「尾太道」の提案がなされ、新道開削と物資の中継点として「中小屋」が設置されて尾太鉾山への経路が大幅に変更された。当絵図は、この中小屋の記載がないので、享保七年以前と推定される。

- (23) 南蛮紋りについては、「南蛮吹の伝習とその流伝」（『泉屋叢考』第六輯 一九五五年）、「近世住友の吹所の研究」（同前 第一九輯、一九八〇年）二五—二八ページなどを参照した。

- (24) なお住友の泉屋友秀が幕府の諮問に応えて書き上げた、元禄十五年（一七〇二）「諸国銅山寛」には、「陸奥国之津軽越中守様御領分」として「尾太」が一方所記録されており（『泉屋叢考』第一一輯 一九八七年 四ページ）、住友泉屋と尾太との関わりを示すものとして注目しておきたい。

（はせがわ せいいち・企画編集委員長、弘前大学人文学部教授）